HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』 ： 翻訳・註解(その3)(退職記念)
著者	安酸，敏眞
引用	北海学園大学人文論集，42：213-281
発行日	2009-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
── 翻訳・註解（その３）──

安　酸　敏　眞

第一主要部：文献学的学問の形式的理論

§15．文献。アスト『文法学，解釈学，および批判の基本線』（Ast, *Grundlinien der Grammatik, Hermeneutik und Kritik*, Landshut 1808）。── フープマン『文献学の概要』（Hubmann, Compendium philologiae, Amberg 1846）は，同一の学問分野を含んでいるが，まったく簡略に論述されている。── シュライアーマッハー『新約聖書にとくに関係づけて論じた解釈学と批判』（Schleiermacher, *Hermeneutik und Kritik mit besonderer Beziehung auf das neue Testament*）。これはシュライアーマッハーの手書きの遺稿ならびに講義録に基づいてリュッケによって編集されたもので，彼の『全集』の神学編の第七巻（1838 年）にあたる[1]（巨匠の手によって描かれた完璧な体系。わたしの叙述においては，シュライアーマッハーの理念はこの著作からではなく，より以前に報告された内容から利用されているが，しかしこうした事情のため，わたしはもはや自他の区別をできる状態にない）。── レフェツォウ「考古学的批判と解釈学について」（Levezow,“Über archäologische Kritik und Hermeneutik”）（『ベルリンアカ

[1] *Friedrich Schleiermachers sämmtliche Werke*, Erste Abtheilung. Zur Theologie, 7. Band, *Hermeneutik und Kritik mit besonderer Beziehung auf das Neue Testament*, aus Schleiermachers handschriftlichem Nachlasse und nachgeschriebenen Vorlesungen herausgegeben von Dr. Friedrich Lücke (Berlin: G. Reimer, 1838).

デミー年報』[1833 年] 所収の論文)。── プレラー『考古学的批判と解釈学の概要』(Preller, *Grundzüge zur archäologischen Kritik und Hermeneutik*)『古典古代学時報』(1845 年) 付録 Nr. 13ff. (これは同誌の『古典古代学の領域からの選集』*Ausgewählte Aufsätze aus dem Gebiet der klassischen Alterthumswissenschaft* [ベルリン，1864 年] に再録されている)。── 1862 年にアウクスブルクで開催された，第二十一回文献学者会議の議事録 55-60 頁に収録されている，ブルジアン「考古学的批判と解釈学」(Bursian,"Archäologische Kritik und Hermeneutik")。── [1867 年にハレで開催された第二十五回文献学者会議の Ad.ミヒャエリスの弁論，159ff.。── C. v.プラントル『理解と判断』(C. v. Prantl, *Verstehen und Beurtheilen*, München 1877)。]

ひとは論理学，つまり哲学的認識についての形式的理論を，無益なものと宣言してきたように，文献学的認識，つまり理解 (Verstehen) についての形式的理論を，余計なものと見なすこともできる。論理学が発見される前に，ひとは論理的に考えてきた。そしてそのために或る理論を必要とすることなく，他者の思想を理解してきたし，また日々それを理解している。だがこのことは，われわれが理解の本質についてすでに述べたことから簡単に説明できる。すなわち，正しい理解は，論理的思考と同様，ひとつの技術 (Kunst) であり，それゆえ部分的には半ば無意識的な熟達に基づいているのである。何かある別の技術にとってと同じくらい，理解するには特別な才能と特別な修練が必要である。他者の思想を解釈する際に日々犯される多くの間違いは，このことを示している。それどころか，学問の全時代と全学派がこのことを示してきた。こうしたことは，とくに宗教と哲学において，明確に浮かび上がってくる。両者は詩歌と同様，全面的に内的直観へと向けられており，また先験論的である。ところで理解は正反対の思考方向を要求するので，宗教的および哲学的な頭脳の持ち主は，詩的な頭脳の持ち主と同様，解釈ということを最も理解しない，とくに彼らが神秘主義に敬意を表するときにはそうである，ということは決して不思議な

ことではない。東洋全体は知力が抑圧されているために，理解するための素質をあまり具えていない。理解すること（Verstehen）── 知力（Verstand）はそこからその名称を得ている ── は，たとい想像力も必然的にそれにともに作用せざるを得ないとしても，本質的に知力の活動である。それは客観性と受容性を必要とする。主観的になればなるほど，またみずからをひいきにすればするほど，理解の才能は少なくなる。ひとはあらゆる知力に反した解釈をいかにすることができるかについては，哲学においては，新プラトン主義者たちが，プラトンの解説をする際に，ひときわ優れた実例を与えてくれる。そして新約聖書においては，間違った解釈にまったく始めもなければ終わりもない。けれども解釈者たちのなかには，精神と知識に富んでいて，多くのことを理解できるのに，このことだけは理解できない人たちがいる。著名な文献学者たちもまた，しばしば理解することに習熟しておらず，最良の者たちですらしょっちゅう思い違いをする。それゆえ，理解するのに実際に一つの技術が必要であるとすれば，この技術にはそれなりの理論がなければならない。その理論は理解の原則を学問的に発展させたものを含んでいなければならず ── もちろん大抵の解釈学と批判の作業においてそうであるように ──，単に実践的なあれこれの規則であってはならない。これらの諸規則は，それ自体としてはまったく良いものであるが，しかし理論においてはじめてその本当の説明を見出し，特殊な適用においてはるかに上手に習得される。それと同時に，およそ文献学的技術はあらゆる技術と同様，実際に行使するなかで学ぶことのできるものであり，理論の全体はこのような実行から帰納的に導き出されるべきである。論理学の知識があってもそれ〔だけ〕では哲学的思想家になれないように，理論によっては誰も良い釈義家や批評家にはなれない。理論の価値は，それがなければひとが無意識的に営んでいることを，意識へともたらすところにある。解釈と批判とが目指す目標と，こうした活動を主導しなければならない視点は，文献学的活動を純粋に経験的に営んでいる人には，ぼんやりと不完全に思い浮かぶだけであり，理論によってのみ学問的明晰性へと高められる。それゆえ，理論は文献学的活動の実行を規則

正しくする。それは混乱の原因と確実性の限界を指し示すことによって，眼識を鋭敏にし，混乱を防ぐ。それゆえ，文献学は理論によってはじめて本当に技術となる。多くの文献学者たちが，解釈と批判における単なる経験的熟達を，すでに技術と見なしているとしても。なぜなら，ここでも「官吏の杖をもっている者は多いが，神から霊感を受けた者は僅かである」(Πολλοὶ μὲν ναρθηκοφόροι, Βάκχοι δὲ γε παῦροι*)[2] と言われているからである。

われわれは，理解についてのわれわれの定義に従って，理解するという行為において解釈学と批判を別々の契機として区別した。ライヒャルトはこのような区別が許容できるかどうかに異論を唱えて，批判は解釈の一契機にすぎないということを証明しようと努めている（『文献学の区分』*Gliederung der Philologie*，19頁以下)。しかしながら，両者は明らかに異なった機能である。われわれが解釈学に対象それ自体を理解するという課題を割り振ったとき，それによって意図されているのは，当然のことながら，ひとは他の多くのものを顧慮することなく何かを理解することができる，ということではない。解釈するためには，実に多様な補助手段が用いられなければならない。しかし目的は，問題となっている対象そのものを，その固有の本質において理解することである。これに対して，批判が，例えば，一つの読み方が正しいかどうか，あるいは一つの作品が特定の著作家が書いたものかどうか，を確定するとき，これらについての判断が獲得されるのは，その読み方が周囲の状況に対してもっている関係が，あるい

---

* 『小品集』第五巻，248-396頁所収の，ピンダロスの詩を批判的に論じた学術論文を参照されたい。

[2] *A Greek-English Lexicon*, compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, revised and augmented throughout by Henry Stuart Jones (Oxford: Oxford University Press, 1990)の“ναρθηκοφόρος”の項には，Zen.5.77を典拠としてこの句が引かれている。ちなみに，それには“there are many officials, but few inspired”という英訳が併記してある。

はその作品の性質が当該の著作家の個性に対してもっている関係が，調査されることを通してである。このような調査は，二つの比較された対象が一致するか，あるいは両者が異なるものであるか，を明らかにする。そこから次に，さらなる結論が導かれる。あらゆる批判において，ひとはそのようなやり方で処理する。例えば歴史的行為が判断されるとき，批判はその行為がそこで追求されている目的と，あるいは正義の理念などと，一致しているのかいないのかを調査する。詩についての美的批判においては，その詩がそれが属する文学的ジャンルの芸術的規則と一致しているかどうかが調査される。それゆえ，批判の課題は一つの対象それ自体を理解することではなく，多くの対象の間の関係を理解することである。その場合，解釈学的機能と批判的機能がお互いをどのように前提し合っているかは，のちほど示されるであろう。

解釈学と批判はいつでも，ある伝承されたもの，あるいは一般的に報告されたもの，に関係する。これはあらゆる多様性にもかかわらず，いずれにせよ，認識されたもののしるしであるか，すなわちすべての言語的報告，文字的記号，音符などのように，形式に従って後者とは異なっているものであるか，それともそれは芸術作品や技術作品，直観に直（じか）に与えられた生活の仕組みなどのような，そこに表現されているものと形式に従って一致している形成物である。しかし後者の種類の精神的発露もまた，解釈学と批判によって解読されなければならない，いわばヒエログリフ［「聖なる刻字」の意。古代エジプトの象形文字。］のようなものである。なぜなら，ひとはいろいろな形式についての正しい認識から，人間の活動の所産における形式の意義を，あるいはむしろそれを通して表現された理念を，作品の内実ないし意味を，推論するからである。これはまだあまり顧慮されていない特別な視点である。芸術と技術の形成物に関して，ひとは考古学的な解釈学と批判を形成し始めたところである（先述の文献解題で触れた試みを参照のこと）。われわれは一般的理論のこうした特殊的応用をわれわれの叙述からは排除せざるを得ない。

第一節　解釈学の理論

§16．文献。カール・ルートヴィヒ・バウアー『最良の解釈学説によってトゥキュディデスを読むことについての論文』(Karl Ludw[ig] Bauer, *dissertatio de lectione Thucydidis optima interpretandi disciplina*. Leipzig 1753)。── ゲオルク・フリードリヒ・マイアー『一般的な解釈技法の試み』(Ge[org] Fr[iedrich] Meier, *Versuch einer allgemeinen Auslegungskunst*. Halle 1757)。── シェーラー『古代のラテン著作家を文献学的かつ批判的に説明するための手引き』([Immanuel Johann Gerhard] Scheller, *Anleitung die alten lateinischen Schriftsteller philologisch und kritisch zu erklären*. 2. Ausg. Halle 1783)。── ヨーハン・アウグスト・エルネスティ『新約聖書の解釈の提要』第五版（Joh[ann] Aug[ust] Ernesti, *Institutio interpretis novi testamenti*. 5. Aufl. Leipzig 1809.）── モールス『新約聖書の解釈学についての学術講演』([Samuel F. N.] Morus, *Super hermeneutica N. T. acroases academicae*, herausgeg. von Eichstädt. Leipzig 1797-1802, 2 Bde.）── ベック『古文書および記念物の解釈についての註解』([Christian Daniel] Beck, *Commentationes de interpretatione veterum scriptorum et monumentorum*. Leipzig 1790, 91, 99）（部分的には浅薄な判断，部分的には覚え書きを編集したもの）── ゴットロープ・ヴィルヘルム・マイアー『旧約聖書解釈学の試み』(G[ott]lo[b] Wilh[elm] Meyer, *Versuch einer Hermeneutik des Alten Testaments*. Lübeck 1799, 1800. 2 Bde.）── カール・アウグスト・ゴットリープ・カイル『文法的・歴史的解釈の原則による新約聖書の解釈学の教本』(K[arl] Aug[ust] Gottlieb Keil, *Lehrbuch der Hermeneutik des Neuen Testaments nach Grundsätzen der grammatisch-historischen Interpretation*. Leipzig 1810）── フリードリヒ・リュッケ博士『新約聖書の解釈学とその歴史の概要』(Dr. Fr[iedrich] Lücke, *Grundriss der neutestamentischen Hermeneutik und ihrer Geschichte*（講義で使用するためのもの，ならびにわれわれの時代の解釈学研究についての手ほどき）Göttingen 1817）── ヘンリク・ニ

コライ・クラウゼン『新約聖書の解釈学』（Henrik Nikolai Klausen, *Hermeneutik des Neuen Testaments*, aus dem Dänischen übers. von C. O. Schmidt-Phiseldek, Leipzig 1841）──『芸術と学問のハレ・エンチクロペディー』（*Halle'sche Encyklopädie der Künste und Wissenschaften*）所収のエーミル・フェルディナント・フォーゲル「解釈学と解釈者」（Emil Ferd［inand］Vogel,"Hermeneutik und *Interpres*"）── シュライアーマッハー『F・A・ヴォルフのほのめかしとアストの教本に関連しての解釈学の概念について』（［Friedrich Daniel Ernst］Schleiermacher, *Ueber den Begriff der Hermeneutik mit Bezug auf F. A. Wolfs Andeutungen und Asts Lehrbuch*. Akad. Abh. v. 1829. Werke, zur Philosophie, 3. Bd. 344ff.）── ディッセン『ピンダロスの詩歌の理論について，およびそれにつけ加えて解釈のジャンルについて』（［Georg Ludolf］Dissen, *De ratione poetica carminum Pindaric. et de interpretationis genere iis adhibendo*. In der Ausgabe des Pindar Bd. 1, Gotha 1830）── F・H・ゲルマール『一般解釈学と神学的解釈学へのその応用のための寄稿論文』（F［riedrich］ H［einrich］Germar, *Beitrag zur allgemeinen Hermeneutik u. deren Anwendung auf die theologische*. Altona 1828），同『近代的釈義の批判』（*Kritik der modernen Exgese*. Halle 1839）── ゴットフリート・ヘルマン『解釈の機能について』（Gottfr［ied］Hermann, *De officio interpretis*, 1834, abgedruckt in seinen *Opusculis* vol. VII*）── カレル・ガブリエル・コベット『文献学者の主要機能としての，文法学と批判学の基礎に依拠した，解釈の方法についての演説』（Car［el］Gabr［iel］Cobet, *Oratio de arte interpretandi, grammatices et critices fundamentis innixa, primario philologi officio*. Leiden 1847）── ［シュタインタール『解釈の方法と形式について』（［Heymann］Steinthal, *Ueber die Arten und Formen der Interpretation*. Verhandlgn. der 32. Versammlung deutscher Philologen.

---

* この論文の批評（1835 年）（『小品集』第七巻，405-477 頁）と，ディッセンの論文の批評（1830 年）（同 377-378 頁）を参照のこと。

Leipzig 1878)]。

解釈学（Hermeneutik）という名称は，ヘルメーネイア（ἑρμηνεία）に由来している。この言葉は明らかに神ヘルメース（ヘルメアス）（Ἑρμῆς [Ἑρμέας]）の名前と関連があるが，しかしここから導き出せるものではなく，むしろ両者は同じ語源を有しているのである。これがいかなるものであるかは確かではない。神ヘルメースはおそらく冥府の神々に属しているが，もしひとが神ヘルメースの原義を度外視するとすれば，この神々の使者はデーモンと同様，神々と人間との間の仲保者として現れる。彼は神的な思想を明示し，無限的なものを有限的なものへと翻訳し，神的な精神を感覚的現象へともたらす。ここから彼は区別，尺度，特殊化の原理を意味する。かくしていまや，意志の疎通（Verständigung）に属するすべての事柄(τὰ περὶ τὴν ἑρμηνείαν)，とりわけ言語と文字，の発明もまた彼に帰せられる。なぜなら，これらによって人間のいろいろな思想は形成され，そうした思想のなかにある神的なもの，無限的なものは，有限的な形式へともたらされるからである。つまり内的なものが理解可能にされるのである。ヘルメーネイアの本質はこの点に存している。それはローマ人が elocutio〔言表，表現〕と名づけたところのものである。すなわち思想の表現ということ，したがって理解すること（Verstehen）ではなく，理解できるようにすること（Verständlichmachung）である。この言葉の非常に古い意味はこれに結びついており，それによればこの言葉は，他者の会話を理解できるようにすること，通訳することである。ホ・ヘルメーネウス(ὁ ἑρμηνεύς)，つまり通訳は，すでにピンダロスの『オリュンピア祝勝歌集』オリュンピア第二歌に見出される[3]。通訳することとしては，ヘルメーネイア(ἑρμηνεία)は本質的にエクセーゲーシス（ἐξήγησις）〔説明，解釈〕と異なるものでは

[3]「だがそれは智ある者にだけ語りかけ，万人に向かっては解釈者を必要とする。」ピンダロス，内田次信訳『祝勝歌集／断片選』（西洋古典叢書）京都大学学術出版会，2001 年，23 頁。

ない。そしてわれわれはたしかにエクセゲーゼ（Exegese）〔釈義〕を解釈学と同義のものとして用いる。古代のエクセーゲータイ（ἐξήγηταί）〔解釈者，説明者〕におけるエクセゲーゼの最も古い用法は，聖遺物の解釈であった（これに関しては，『芸術と学問のハレ・エンチクロペディー』所収のベールの記事「エクセゲーゼ」を参照のこと）。しかし解釈学においては解釈だけでなく，解釈によってただ説明されるだけの，理解そのものが問題である。この理解は，もしこれが表現として把握されるとすれば，ヘルメーネイアの再構成である。

ひとがそれに従って理解すべき原則，つまり理解の諸機能は，いたるところで同一であるので，解釈の対象によって解釈学の特殊な相違が生じることはあり得ない。聖なる解釈学（hermeneutica sacra）と俗なる解釈学（hermeneutica profana）との間の相違は，したがってまったく許容されない。聖書が人間的な書物であるとすれば，それはまた人間的な法則に従って，すなわち通常の仕方で理解されなければならない。しかし聖書が神的な書物であるとすれば，それはあらゆる解釈学を超えており，理解の技法によってではなく，神的な霊感によってのみ把握され得る。しかしながら，すべての真に聖なる書物は，あらゆる天才的な霊感から成立した作品と同様，おそらくひたすら二つの源泉から同時に理解されるのが好ましい。人間の精神は，あらゆる理念をみずからの法則に従って形成するのであるから，たしかに神的な起源を有している。これに対して，対象の特殊性に応じて，一般的な解釈学的原則の特殊的な適用が存在する。それゆえ，ローマ法の解釈学やホメロスの解釈学などと同じように，新約聖書の特殊的な解釈学ということは，もちろん考えることができる。しかしこれは素材に従って様々に変化するものの，根本的には同一の理論である。芸術解釈学という分岐もまたここに属する。これは芸術作品を言語的記念物とまったく類比的に説明しなければならない。われわれが考古学的解釈の特殊な性質を考慮しないように，われわれはまた言語的作品における素材の特有性からのみ生ずるものは，すべてこれを度外視する。つまり言語的伝統の大部分は文字によって固定されているので，文献学者は説明する際に，１）

書き記すもののしるし，つまり文字，2)書き記すもの，つまり言語，3)書き記されたもの，つまり言語に含まれている知識，を理解しなければならない。古文書学者（Paläograph）はしるしのしるしに立ち止まる。これはプラトンが『国家』第六巻509でエイカシア（εἰκασία）〔似姿，像〕と呼ぶ認識の段階である。単なる文法学者は書き記されたもののしるしに，つまりドクサ（δόξα）〔臆見，思わく〕という認識の段階に固執する。ひとが書き記すものそのものまで，つまり思想にまで突き進むときにのみ，真の知たるエピステーメー（ἐπιστήμη）〔知識〕が成立する。われわれはいまや文字のしるしを前提とし，それゆえ解読の技術には携わらない。この解読の技術は，それを解く鍵がない場合には，限りなく多くの未知のものに基づく解釈学である。同様にわれわれは，言語的特徴づけと書き記された思考との間の相違を考慮しない。われわれは言語の音声の側面ではなく，言葉で結合された表象をのみ解釈学の対象と見なすからである。かくして，そのようにして見出された原則は，こうした表象が言語によるのとは異なった仕方で表現されている場合でも，妥当性をもっていなければならない。われわれはみずからの理論において，報告の最も一般的なオルガノンとしての，言語に限定されているが，それにもかかわらずそうである。

§17．解釈の実際の特殊な相違は，解釈学的活動の本質からのみ導き出される。理解とその表現たる解釈にとって本質的なのは，報告されたものあるいは伝承されたものの意味および意義が，それによって制約され規定されるところのものについての意識である。これに属するのは，まず報告手段の，すなわち――いま暗示したばかりの限定における――言語の，客観的意義である。報告されたものの意義は，まずもって語義そのものによって制約され，そして通用している表現の全体が理解されるときにのみ，理解され得る。しかしながら，あらゆる語り手ないし書き手は，言語を特有かつ特別な仕方で用いる。つまり語り手ないし書き手は，みずからの個性に従って言語に変更を加える。それゆえ，どんな人であれその人を理解するためには，その主観性を考慮に入れなければならない。われわれはその

ような客観的・一般的な見地からの言語の解釈[4]を文法的解釈（grammatische［Interpretation］）と名づけ，主観性の見地からの言語の解釈を個人的解釈（individuelle Interpretation）と名づける。しかしあらゆる報告の意味は，そのもとでそれが生起する現実の諸関係，ならびにそれが向けられている当人たちにおいて，その知識が前提されている現実の諸関係によって，さらに制約されている。一つの報告を理解するためには，ひとはこうした諸関係の中に身を置かなければならない。例えば，一つの文字作品は，それが成立した時代の通用している表象との連関において，はじめてその真の意義を獲得する。現実の状況からのこの解釈をわれわれは歴史的解釈（historische Interpretation）と名づける。われわれはこれによって，通常，事実解釈（Sacherklärung）ということで理解されているところのもの，すなわち歴史的注釈の山を築き上げること，を意味してはいない。かかる歴史的注釈の山は，解釈される作品を理解するためにまったく無くても済むものである。なぜなら，釈義は理解の諸条件を提供しさえすればよいからである。歴史的解釈は，語義そのものが客観的な状況によってい

---

[4] ここで「解釈」と訳したのは，通常は「説明」ないし「解説」と訳される，“Erklärung”という語である。以前にも指摘したように（「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』── 翻訳・註解（その１）──」『人文論集』第 40 号，18 頁，注 13），ベークの場合には，ディルタイにおけるような「理解」（Verstehen; verstehen）と「説明」（Erklärung; erklären）の明確な概念的区別は存在しない。それゆえ，この事例でも明らかなように，ベークにおいては“Erklärung”ないし“erklären”という語は，自然科学の認識方法にもっぱら関わるものではなく，むしろ考察対象の《理解》をこととする解釈学的行為にもひとしく用いられる。したがって，もしわれわれが“Erklärung”ないし“erklären”を，機械的に「説明」ないし「説明する」として翻訳すると，ディルタイ的語法に慣れ親しんでいる読者には，かなりの違和感が生じざるを得ない。それゆえ，ここでは“Erklärung”と“Interpretation”ないし“Auslegung”，“erklären”と“interpretieren”ないし“auslesen”を厳格に区別することはせず，多くの場合に「解釈（する）」と訳出することにする。

かに変更を加えられるかを調査することによって，文法的解釈と密接に結びついている。しかし報告の個人的側面もまた，その影響下で報告がなされるところの，主観的な状況によって変更を加えられる。かかる主観的状況は報告者の方向と目的を規定する。多くの人々に共通な報告の目的が存在する。そこから報告についての一定のジャンル〔文芸作品の様式上の種類・種別〕が，つまり言語では説話のジャンルが生じる。韻文と散文の特質ならびにそれらの異なった語り方は，叙述の主観的な方向と目的とに存している。このような一般的な相違へと個々の著者の個人的目的は整頓される。すなわち，個人的目的は一般的ジャンルの変種にすぎない。目的は報告されたものの理想的な，高次の統一であり，かかる統一は ── 規範として設定されると ── 芸術の規則であり，またそのようなものとしてつねに特別な形式で，つまりジャンル (Gattung) というかたちで，表現されて現れる。それゆえ，ひとは報告をこの側面へと解釈することを，種類的解釈 (generische Interpretation) と名づけるのが一番良い。歴史的解釈が文法的解釈に結びつくように，種類的解釈は個人的解釈に結びつく。

このような四種類の解釈において，理解のすべての条件が捉えられるということ，つまりこの列挙が完全であるということ，このことは以下のような区分の概観から帰結する。

解釈学は，以下の通りである。

Ⅰ．報告されたものの客観的な諸条件からの理解

a）語義そのものから ── 文法的解釈

b）現実の状況との関係における語義から ── 歴史的解釈

Ⅱ．報告されたものの主観的な諸条件からの理解

a）主体それ自体から ── 個人的解釈

b）目的と方向のうちに存している主観的状況との関係における主体から ── 種類的解釈

§18．さて，これらの異なった種類の解釈は，相互にどのような関係にあるのだろうか。たしかに，われわれは概念に従ってそれらを明確に区別し

たが，しかし解釈そのものを実行する際には，それらはつねに混じり合う。ひとは個人的解釈を利用することなしには，語義そのものを理解することができない。なぜなら，誰かによって話される言葉は，いかなる言葉であろうとも，すでにその人が一般的な語彙から取り出したものであり，ある個人的な付加物をもっている。この付加物を抽出しようとすれば，ひとは話し手の個性を知らなければならない。同じように，一般的な語義は，現実の状況と説話のジャンルによって変更を加えられている。例えば，βασιλεύς〔一般的には「王」の意〕という語は，ホメロスの用語法においてとアッティカ共和国においてでは，全く異なった意味をもっている。χρόνος〔時，時間〕やσημεῖον〔しるし〕といった語は，哲学と数学と歴史学の叙述においては異なった意味をもっている。ひとは語義のこのような制約を歴史的解釈と種類的解釈によって確定しなければならないが，しかしながらそれらの要素はふたたび文法的な解釈によってのみ見出され得る。なぜなら，すべての解釈は文法的解釈から出発するからである。

ここから生じる課題の循環は，すでに上述の53頁以下〔§12参照〕で言及された困難，つまり文献学の形式的機能とその実質的結果との関係に存する困難，に立ち戻るよう命ずる。すなわち，文法的解釈は文法の歴史的発展についての知識を必要とする。歴史的解釈は歴史一般についての特別な知識なしには不可能である。個人的解釈のためには個人についての知識が必要であり，そして種類的解釈は様式のジャンルについての歴史的知識に，したがって文学史に基づいている。そのようにこれらの異なった種類の解釈は，実際のいろいろな知識を前提としているが，これらの知識はすべての資料の解釈によってはじめて獲得され得るものである。しかしここから同時に判明するのは，この循環がいかにして解決されることができるかということである。すなわち文法的解釈は，それをさまざまな個人的ならびに現実的な諸条件のなかで考察することによって，ある表現の語義を突きとめる。そしてこれを言語全体へと拡大することによって，言語の歴史が作り出され，文法と辞書が作り上がられる。ところでこの文法と辞書は，その後ふたたび文法的解釈に奉仕し，同時に進展する解釈学的活動に

よって完成させられる。これによってひとは爾余の種類の解釈に対する，同時にまた実質的学問分野一般の構築に対する，基礎を手にする。こうした学問分野がより広範に発展すればするほど，解釈はより完全に成功する。例えば新約聖書の解釈は，ギリシア古典作家の解釈の後回しにならざるを得ないが，その理由は，新約聖書においては文法，文体論，そして歴史的諸条件が，はるかに不完全に突きとめられているからである。アッティカ［中部ギリシア南部の半島をなす地方で，紀元前8世紀までにアテナイを中心に統一され，ここを中心に古典ギリシア文化が花開いた。］の作家の文法はそれ自体，新約聖書の言語のそれよりも無限にはっきりした特徴をもっている。新約聖書の言語は，ギリシア的なものとオリエントのものとの悪しき混合の産物であり，より粗悪な言葉遣いだからである。さらには，新約聖書の著者たちは無教養な人たちであって，彼らはアッティカの人々において見出されるような，はっきりした特徴をもった芸術形式については，まったく想像もつかない。それゆえ，彼らの文体を理解するためには，彼らの宗教的熱狂と彼らの理念のオリエント的活力とに身を置いて考えなければならない。しかし新約聖書の書物がそのもとで成立した歴史的諸条件は，神話的な曖昧さによって包まれている。ギリシア人の古典的時代に関しては，文体の形式についての知識は，叙情詩的詩歌において最も不完全である。したがって叙情作家の解釈はとくに困難である。ここでは詩人の作詩法は，その詩人の作品そのものから，解釈によって見出されるべきである。だがしかし，解釈は最も重要な点で，ひとが作詩法から形成した表象に依存している。それゆえ，ここでは循環が特別な技法を用いて回避されなければならない。そこでわたしは次のように主張した。すなわち，ピンダロスの作詩について，われわれの時代に至るまでいかなる概念ももてなかったのは，われわれが彼を解釈する仕方を理解しなかったからであり，また逆に，われわれが彼を解釈する術を知らなかったのは，主として，彼の作詩を理解しなかったからである，と*。同様のことは，シュライアーマッハーによってはじめて

* 『小品集』第七巻，369頁以下所収の「ディッセンによるピンダロス版についての批判」(1830年）を参照のこと。

その作文の手法が突きとめられた，プラトンについても当てはまる。**

たといたえず相互に関連し合っているとしても，いろいろな種類の解釈は必ずしもつねに一様に適用されることはできないということによって，解釈学の課題は容易にされる。個人的解釈が適用可能性の最小限にまで低下するところで，文法的解釈は適用可能性の最大限に到達する。キケロのように，民族と言語の一般的精神のみを叙述する著作家は，主として文法的に解釈され得るが，この場合には解釈は容易である。これに対して，著作家が独創的（オリジナル）であればあるほど，またその著作家の見解と言語が主観的であればあるほど，個人的解釈はますます優勢さを増す。タキトゥスがキケロよりも解釈するのが難しいのは，かかる理由によるのである。文体のジャンル全体も同様の仕方で異なる。叙述が客観的であればあるほど，それだけますます文法的解釈に帰属する。そこで叙事詩や歴史作品においては，例えばタキトゥスにおけるように，著者の主観的性質がこの状況を止揚しないときには，個人的解釈のみならず歴史的解釈もまた最も大幅に後退する。これに対して散文においては，例えば書簡のような親密な書き方で書かれた作品の場合，そして韻文においては叙情詩の場合，解釈は最も錯綜したものとなる。

§19．けれども，解釈学の課題が含んでいるこの循環は，必ずしもすべての場合に回避できるものではないし，また一般には決して完全には回避できるものではない。ここから判明するのは，解釈に設定されている限界ということである。ある表現や言い回しの語義を，それが出現する別の事例と比較して確定することは，もしそれが他のどこでも明瞭にこの形式で存在していないとすれば，さしあたり不可能である。まさに同一の対象が同時に文法的解釈と個人的解釈の，あるいは個人的解釈と種類的解釈の，あるいは歴史的解釈と種類的解釈の，唯一の基礎であるとすれば，その課題

**『小品集』第七巻，１頁以下の「シュライアーマッハーによるプラトンの翻訳についての批判」（1808 年）を参照のこと。

は解決不能である。しかしそれ以外にも，あらゆる個人的表現は限りない数の状況によって制約されており，したがってこれを論証的明晰性へともたらすことは不可能である。ゴルギアスは『自然について』(περὶ φύσεως)という書物のなかで，現実的認識を伝達する可能性を否定しているが，そこで次のように述べている。すなわち，聞き手と話し手とは ── 彼の爾余の根拠を無視するならば ── お互いに異なっているので，聞き手は言葉を聴いたとき話し手と同一のものを考えない。なぜなら，「どちらも相手と同じことを考えない」(οὐδεὶς ἕτερος ἑτέρῳ ταὐτὸ ἐννοεῖ)からである。同一の人間ですら同一の対象を必ずしもつねに同一の仕方で知覚はせず，したがって自分自身を完全には理解しない。それゆえ，もし異なった個人が完全には決して理解され得ないとすれば，解釈学の課題はただ無限の近似(Approximation)によってのみ，つまり一項一項前進するが決して完結することのない漸進的な接近によってのみ，解決され得る。

しかしながら，感情にとっては，ある場合には完全な理解が達成される。そして解釈学的な芸術家は，そのような理解を所有することで，難題を解決すればするほど，ますます完全になるであろう。しかしもちろん有為なる感情をさらに踏み込んで解釈することはできない。この感情とは，それのおかげで他者が認識したところのものが，いっぺんに再認識される当のものである。そしてそれがなければ，実際にいかなる伝達能力も存在しないであろう。つまり，個々人は異なっているにもかかわらず，彼らはまた多くの関係において一致している。だからこそひとは算定することによって，他人の個性をある程度まで理解することができるが，少なからぬ表現においては，感情のなかに与えられている生き生きとした直観によって，それを完全に把握することができる。ゴルギアスの命題には，「似たものは似たものを知る」(ὅμοιος ὅμοιον γιγνώσκει) という別の命題が対立している。── これこそ，それによって理解が可能となる，唯一のものである。つまり親和性 (Congenialität) が必要なのである。このような仕方で解釈する人のみが，天才的な解釈者と名づけられ得る。なぜなら，解釈されるものとの類似性から作用を及ぼす感情は，内的に生産的な感情だからである。

ここでは悟性に代わって，想像力が解釈学的活動として現れる。そこからまた，修練を別にすれば，必ずしも誰でもがすべてに対して同じほど優れた解釈者ではあり得ず，一般的に解釈するためにはもともとの才能が必要である，ということになる。ルーンケン［David Ruhnken, 1723-1798.ドイツの古典文献学者。オランダのライデン大学教授（1761-98）。多くの後期古代作家の校訂註解を行った。］が批判について述べた，「批評家はなるものではなく，生まれるものである」（Criticus non fit, sed nascitur）ということは，解釈にもまた当てはまる。すなわち，「解釈者はなるものではなく，生まれるものである」（Interpres non fit, sed nascitur）。しかしこのことが意味しているのは，ひとは学問を速成で習得することは決してできず，ただ発展させ鍛錬することができるだけだということである。本性は鍛錬によって形づくられ，眼識は理論によって鋭くなるが，しかし本性そのものがまず存在しなければならないことは，明らかである。生まれつき理解するための眼識をもった人たちが存在する。これに対して，人間は誤解するためにも理解するためにも生まれついているので，少なからぬ解釈者は基礎からして間違っている。解釈学的な諸規定を機械的に適用することによって，才能は発展するものではない。むしろひとが解釈する際にみずから生き生きと自覚している諸規則は，鍛錬によって無意識的に考察できるほどによどみないものにならなければならない。しかしそれは同時に，それのみが具体的な解釈の確実性を保証する，自覚的な理論へと結合されなければならない。真正の解釈学的芸術家においては，かかる理論そのものは感情のなかへ受け入れられ，そしてそのようにして，屁理屈をこねる詭弁から守られた，正しい勘が成立する。

著作家は文法と文体論の原則に従って文章を作るが，大抵はもっぱら無意識的に作る。これに対して解釈者は，その原則を意識することなしには，完全には解釈することができない。なぜなら，理解する人はなにしろ反省するからである。著者は生み出すのであり，彼自身がそれについてさながら解釈者として立っているときにのみ，自分の作品について反省するのである。ここから帰結してくることは，解釈者は著者自身がみずからを理解するのとまさに同じくらいだけでなく，さらにより良く理解することさえ

しなければならない，ということである。なぜなら，解釈者は著者が無意識的に作ったものを，明瞭な意識へともたらさなければならないからである。そしてそのときにまた，著者自身には無縁であった幾つもの事柄が，あるいは幾つもの見込みが，解釈者に開けてくる。解釈者はそのなかに客観的に潜んでいる，かかるものをも知らなければならないが，しかし主観的なものとしての著者自身の意図からは，それを区別しなければならない。そうでないとすれば，解釈者は，プラトンについてのアレゴリカル解釈や，ホメロスについての古代の解釈や，新約聖書についての非常に多くの解釈のように，〔意味を〕読み取る代わりに読み込むことになる。そのときにはある量的な誤解が発生し，ひとはあまりにも多くを理解することになる。これはそれとは正反対の，ひとが著者の意図を完全には把握しないとき，したがってあまりにも少なく理解するときに発生する，量的な理解不足と同じほど，欠陥的なものである。それ以外にも，ひとは質的に誤解することがある。このようなことは，著者が意図しているのとは違うものを理解するとき，したがって著者の表象を他のものと取り違えるときに起こる。これはまた，とくにアレゴリカル解釈においては，例えばある現存のアレゴリーを間違って解釈する際に，生起する。

§20．われわれはここで，アレゴリカル解釈をより詳細に論じる。幾人かのひとはこれを特殊な種類の解釈学と見なしている。聖書においては，文字的な意味，アレゴリカルな意味，道徳的な意味，そして神秘的な意味(der anagogische oder mystische [Sinn])[5] という，四重の意味が区別されるべ

[5] anagogisch という形容詞は，ギリシア語の名詞 ἀναγωγή〔＝(独) das Hinaufführen; das “Hinaufführen” des Eingeweihten zur Schau der Gottheit；(英) leading up; lifting up of the soul to God〕に由来する。アナゴーゲーは，本来，「上へ連れて行く」「導き上る」「持ち上げる」ことを含意するが，そこから神秘主義に特有な，宗教的に高揚した恍惚状態を意味するようになった。かくして anagogisch は mystisch とほぼ同義に用いられるようになった。

きだとの中世に支配的な見方は，アレクサンドリアの哲学と神学に由来する。これに従えば，四つの種類の解釈が生じるが，しかしこれらは二種類に還元され得る。文字的な意味の解釈に対立しているのは，アレゴリカル解釈，すなわち文字的な意味とは異なる意味を証明するものだけである。道徳的解釈と神秘的解釈は，アレゴリカル解釈の変種にすぎない。前者において，文字的な意味の代わりに用いられる意味とは，ひとが譬え話や寓話のなかに与えられている感覚的イメージの意味として，道徳的思想を見出すときのような，道徳的意味である。これに対して神秘的解釈においては，アレゴリカルな意味とは思弁的な意味である。例えば，神話におけるいろいろな表象は，超感覚的な存在の像として把握される。すなわち，それは「知覚し得るものから思惟によって捉えられるものへと連れ戻される」（ἀνάγεται ἀπὸ τοῦ αἰσθητοῦ ἐπὶ τὸ νοητόν）。しかし文字的な意味は，理想的なイメージ，あるいはアレゴリカル解釈がそれに代えて別の感覚的な対象を用いるところの，感覚的な対象を表示することもあり得る。例えば，ピンダロスの『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第四歌において，ひとがペリアス［ポセイドンとテュロの子。イオルコス（テッサリアのマグネシア）王。］とイアソン［イオルコス人，アイソンの子。アルゴ乗組員の指導者。］の形姿をアルケシラオス[6]とダモピロス[7]という歴史上の人物のアレゴリカルな叙述として解釈するときがそうである。そのようなアレゴリーは単純なアレゴリー，あるいは歴史的なアレゴリーと名づけることができる。

アレゴリー一般の本質から帰結してくることは，アレゴリカル解釈はいずれにせよ非常に広い適用範囲を見出さなければならない，ということである。なぜなら，アレゴリーは言語と思考の本質に深く基礎づけられており，それゆえ頻繁に適用される叙述方法だからである。まず神話がアレゴリカルに解釈されなければならない。なぜなら，神話はつねに超感覚的な

---

[6] リビアのキュレネの代々の王の名前であるが，ここで言及されているのはアルケシラオス四世のこと。民主制を叫ぶキュレネ人たちによって殺害され，８代続いたバッティダイ王朝は滅亡した。

[7] リビアのキュレネの貴族。『ピュティア第四歌』当時亡命中で，テーバイでピンダロスにもてなされたこともあるという。

ものの感覚的象徴であって，それゆえことばが言い表すのとは異なる意味を含んでいるからである。したがって，聖書をアレゴリカルに解釈することは，その基礎が神話的であるので，正当化されることである。唯一問題であるのは，ここで聖書記者がこのアレゴリカルな意味をどのくらい意識的に解釈のなかに含めたか，ということである。さて，古代人の詩歌全体は神話によって貫かれており，また一般にすべての芸術は象徴的なやり方をするので，古代文学のすべての部門はアレゴリカル解釈を必要とする。すべての叙事詩は神話的な物語であり，それゆえ古代人はすでにホメロスをアレゴリカルに解釈した。しかしこの種の解釈はここで，神話のもともとの意義について何も知らない，詩人の意図を超える。それゆえ解釈者はここで，自分がどこでホメロスを解釈しているのか，あるいはどこで神話そのものを解釈しているのか，綿密に区別する必要がある。例えば，『神曲』*Divina commedia* においてアレゴリーを徹底的に意識的に用いるダンテにおいては，事情は全く異なっている。彼においては，アレゴリカル解釈は真になじんだ本来的なものとしてある。それどころか，われわれは『饗宴』*Convito* において，彼自身から真正のアレゴリカル解釈を受け取っているのである。これは，プラトンの『饗宴』に似た愛の哲学を含んでいる，一般的にきわめて注目すべき書物である。彼はそこで，あらゆる文字がいかにして四重の意味で理解され得るか，そして彼自身が詩作において，文字通りの意味のほかに，いかにつねに別の高次の種類を念頭に置いてきたかを，言明している。かくして，例えば，『神曲』におけるベアトリーチェは，同時に最高の学問である思弁的神学のアレゴリカルな表現である。ダンテのアレゴリーのなかでは，同時に時代の性格に相応していたのが，崇高で素晴らしい努力であるが，しかしもちろんそれは，幾つかの風変わりで素敵な表象のなかに，その弱点もみずから担っている。叙情的な詩においては，神話的なアレゴリーは大抵は意識的に用いられる。わたしはすでにピンダロスからの一つの実例を挙げておいた。彼においては，アレゴリーはつねに一定の意味においてのみ見出される。すなわち，彼が扱っている神話の，あるいは詩に詠っている歴史の，同時代人たちの状況への適用と

して見出される。神話は，彼においては，それ自体のために叙述されるのではなく，ある非神話的なもの，ある現実的なもの，を理想的な光のなかに据えるための手段である。神話は人間の生活の理想像であり，それゆえ道徳的思想をも意味にもつことができる。ちなみに，たとい幾つかの叙事詩の形式において，意識的な神話的アレゴリーがまったく生じないとしても，すべてのものは芸術一般に固有な象徴的性格をもっている。すべてにおいて，最も軽快な幻想劇のなかにすら開示される，思想を理解することが肝要である。もちろん，ここでは状況は主に繊細な感情によって仲介される。最も難しいのは演劇におけるアレゴリカル解釈の課題である。演劇の本質は行為の叙述である。しかし行為の内的な核，その魂は，そのなかで開示される思想である。ある悲劇はすでに外的に象徴的なものの特質を帯びている。おそらく最も純粋なのは，アイスキュロスの『〔縛（いまし）められた〕プロメテウス』であろう。しかしすべてにおいて，一つの普遍的な主導的思想がこの古代詩人の念頭に浮かぶ。ソポクレスにおいては，同一のものは『アンティゴネー』のなかで最も明瞭に表現されている。この作品においては，尺度となるものは最高善であり，正しい努力においてすら誰も思い上がったり，激情に従ったりしてはならないという倫理的思想が，登場人物のさまざまな行為のなかに生き生きと具現化される。喜劇においては，普遍的な思想だけでなく，しばしばその時代の事件や状況に関する個性化された思想が，表現へともたらされる。アリストパネスにおける多くのものは，後者の種類のものである。『すずめばち』，『雲』，『蛙』等々の，彼の合唱隊の名前がすでに示しているように，アリストパネスは徹底的に象徴的である。『鳥』は貫徹されたアレゴリーを含んでいる。鳥の国家の設立は，シチリア軍事作戦時のアテナイの国情に対する諷刺である。『アンティゴネー』が道徳的アレゴリーの，『プロメテウス』が思弁的アレゴリーの実例であるように，『鳥』は歴史的アレゴリーの実例である。散文においても，アレゴリカル解釈はさしあたり，神話的なものが及ぶ限りにおいて，適用可能となる。例えば，宗教的散文や哲学においてである。それゆえ，プラトン的な神話は，当然のことながら，アレゴリカルに解釈されなければな

らない。これらの神話は芸術的に形づくられているので，ひとは一方ではそのなかに潜んでいる哲学的思想を突きとめなければならないし，他方ではそのイメージがどこから取られているのか，またその形式と本質が，例えば『パイドロス』において，世界体系についてのフィロラウス［Philolaus. 紀元前5世紀のギリシアのピタゴラス派の哲学者。わずかな断片しか現存していない。］的な表象によって，いかに制約されているかを，調査しなければならない。しかしプラトンは神話においてのみならず，それ以外のものにおいてもまた，思想をアレゴリカルな衣装でくるんでいることが稀ではなく，それゆえアレゴリカル解釈は，彼においては追い払うことができない。それ以外にも，散文のあらゆる分野においてアレゴリカルな部分は見出される。

アレゴリカル解釈の適用可能性に対する判断基準は，文字通りの語義は理解には十分でないということにのみ，明らかに存している。このことは，文法的解釈が個人的，歴史的，種類的な解釈によって突きとめられた事態に対応しない意味を生み出すときに，あてはまる。例えば，ピンダロスの頌歌の文法的な意味が，その頌歌の目的とその基礎になっている諸関係にふさわしくないとすれば，ひとは文字通りの意味を超えていくことを余儀なくされる。アレゴリカルな意味そのものは，つねに原語の本質にふさわしいと同時に，それ以外の諸条件にも合致しているような，文字通りの言葉の意味を転義したものである。それゆえ，アレゴリカルな意味を突きとめるためには，ひとは文法的解釈によって判明する転義の可能的な事例のなかで，作品全体の意味とそのあらゆる部分の相互的関係とが要求する，そのような事例を選び出す必要がある。これはただ個人的解釈と種類的解釈によってのみ見出されうるものであるが，その場合同時に，歴史的解釈によって現実的な諸条件が考察に引き入れられるべきである。アレゴリカル解釈はまた，そうした諸条件によって動機づける以上のところまでさらに行くことは許されない。ここで正しい限界を守ることはもちろん難しいことである。一般的には，もしひとが衒学的な著作家になろうと思わなければ，アレゴリーを個々の点について過度に追求しないよう気をつけなければならない。真に古典的な作品においては，アレゴリーはつねに壮大な

ものとして保たれている。戯れの解釈や屁理屈を捏ねたような解釈は，戯れたり屁理屈を捏ねたりする著作家にのみ適用することが許される。かくしてズュフェルン［Johann Wilhelm Süvern, 1775–1829.プロイセンの教師・政治家。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに倣って，プロイセンの学校教育の改革に尽力した。］は，有名な論文「アリストパネスの鳥について」（『ベルリンアカデミー論文集』1827年）において，あまりにも先に進みすぎた。ケッヘリー［Hermann August Theodor Köchly, 1815–1876.ドイツの古典学者，文献学者，教育改革者。］はわたしへの祝賀の書『アリストパネスの鳥について』（チューリヒ，1857年4月）において，よりすぐれた解釈を与えてくれた。最近の解釈者たちがこの関係で古代の悲劇作家を解釈するやり方は，しばしば子どもっぽい。こうした度を超したやり方に対する見事な批判を，ハインリヒ・ヴァイルの論攷『ギリシア悲劇と国家との結びつきについて』*De tragoediarum Graecarum cum rebus publicis conjunctione*（Paris, 1844）が含んでいる。

もしひとが手元にあるアレゴリーを理解しなかったとすれば，その際にそれ以外の点ではまったく正しく理解しているにもかかわらず，理解したことが少なすぎることによって，量的に間違いを犯している。かくしてひとは，レリーフとか絵画の場合には，アレゴリカルな意味を知らなくても，あらゆる個々の部分と全体の意味とを理解することができる。しかしアレゴリーが，受け入れられるべきでないところで，受け入れられるとすれば，ひとはたしかに量的にも間違いを犯したのであるが，つまりあまりにも多く理解したのであるが，しかし同時に質的に間違いを犯したのである。なぜなら，いまやひとは間違った意味を挿入することになるからである。一つの例を挙げてこれを示してみよう。プラトンの『ティマエオス』は次のように始まる。「一人，二人，三人…おや，四人目の人は，ティマイオス，どこですか。あなた方は，昨日はわたしのお客になったから，今度は主人役にまわって，わたしに御馳走してやろうということでしたが」（Εἷς, δύο, τρεῖς, ὁ δὲ δὴ τέταρτος ἡμῖν, ὦ φίλε Τίμαιε, ποῦ τῶν χθὲς μὲν δαιτυμόνων, τὰ νῦν δὲ ἑστιατόρων;）[8]。古代の解釈者たちはこの箇所の通常の語義を完全に

[8] 『プラトン全集』第12巻，種山恭子・田之頭安彦訳『ティマイオス・クリティ

理解しており，そしてプロクロス［Proklos.［ラ］Proclus Lycaeus, 410/412-485.ギリシアの新プラトン主義の哲学者で，この学派の最後の偉大な代表者。］の註解が示しているように，それについて優れた注釈を行っている。しかし彼らにとって，これでは十分ではない。彼らはそのなかにさらに道徳的な意味を探し，もしこれへのきっかけがまったくないとすれば，さらにその上に，神秘的な意味〔einen mystischen, anagogischen［Sinn］〕を探す。自然界の創作（φυσικὴ ποίησις）全体は数によって組み立てられる，と彼らは言う。さて，対話は物理的内容のものであるので，プラトンは三つの根源的な数でもって始めなければならなかった。しかしそのなかにはある神学的なものも存在すべきであった。一，二，三という数字は神的な三重性を表しており，自然哲学においてはひとはここから出発しなければならない。つまり一性（Einheit）はあらゆる創造の第一原理，あらゆる事物の根源を表している。二性（Zweiheit）は分離の原理ならびに万有の諸要素の区別から生じるあらゆる事物の原像の原理を，三性（Dreiheit）は創造の原理を表している。かくしていまや事態はさらに先へ進む。あらゆる言葉のなかに思弁的・神学的な奥義が探し求められる。これこそが，哲学者が頻繁に解釈するような種類の事例である。ロンギノスはそのようなやり方をしなかったので，哲学者としては認知されなかった（上記，23 頁）[9]。しかし明らかにこの解釈には，量的な誤解だけではなく，質的な誤解もある。著者に由来する諸概念にもともとはない意味が差し込まれるからである。そうした諸概念がそのような意味をもっていないということは，厳密な歴史的ならびに個人的解釈から明らかになる。プラトンも彼の同時代人たちも，そのような変な考えは知らなかった。もし彼の教養が中世から生じてこなかったとしたら，ダンテは同様にそれから守られていたことだろう。

以上に述べたことから，アレゴリーは特別の，そして非常に重要な種類の叙述であること，しかしその理解は決して特別な種類の解釈を構成しな

アス』（岩波書店，1975 年），4 頁。

[9]「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』── 翻訳・註解（その 1）──」『人文論集』第 40 号，39-40 頁参照。

いことを，ひとは見てとることができる。そうではなく，アレゴリカル解釈は他のすべての解釈と同様，われわれが挙げた四つの種類の解釈学的活動の共同作用のうちに存在している。一般にこうした種類の叙述について，しかしとくに神話的な叙述については，ベンヤミン・ゴットホルト・ヴァイスケが，彼の書物『プロメテウスと神話圏』（ライプツィヒ，1842 年）[10]（『叙述の，とくに神話的叙述の，哲学』[11] という表題で復刻されている）への序論で，非常に詳細かつ厳密に論じている。われわれがいまこの四種類の解釈学を個々に調査するとき，われわれは叙述とその手段という概念をより詳しい考察に服せしめる機会を見出すであろう。

Ⅰ．文法的解釈（Grammatische Interpretation）

§21．それぞれ特別な場合に文法的解釈は，それ以外の解釈方法なしには完成されることができないにもかかわらず，ひとはまず言語全体についての一般的な知識から語義を見出し，しかるのち著者の個性についての全体直観から，および歴史的状況とジャンルの性格から，欠けている部分を補足しなければならない。当然のことながら，こうした作業は時間的には相互に並行してなされるが，しかしつねにその基礎を形づくるのは文法的解釈である。それゆえ，われわれはまず文法的解釈について論じよう。

言語とは有意義な諸要素から構成されたものである。そのような諸要素として現れるのは，言葉そのもの，言葉の変化形式と構造，そして語順の形式である。さて，文法的解釈が規定する必要のある客観的な語義は，一方では個々の言語的諸要素それ自体の意義に存しており，他方ではそれらの諸要素の連関によって制約される。

---

[10] Benjamin Gotthold Weiske, *Prometheus und sein Mythenkreis*. Nach dem Tode des Verfassers herausgegeben von Hermann Leyser (Leipzig: K.F. Köhler, 1842).

[11] Benjamin Gotthold Weiske, *Philosophie der Darstellung, besonders der mythischen* (Leipzig, 1841).

1．個々の言語的諸要素それ自体の意義

もしそれぞれの言語的要素がただ一つの客観的意味をもっているとすれば，個々の要素の意義が伝承されているかぎり，文法的解釈は容易いであろう。主たる困難は，いろいろな言葉やそれ以外の言語的形式が多義的である，という点に存している。けれども，ひとがある言語の諸要素の各々が有する複数の意義のなかに,同一の根本的意義を再認識しないときには，ひとはその言語を決して理解しないであろう。文法的解釈は，言語は恣意的な制定によって（θέσει[12]）成立したものではなく，── すでにプラトンが『クラチュロス』において証明したように ── 人間的本性の法則から生じた（φύσει[13]）ものである，という見解から出発しなければならない。もし言語が恣意的な制定によって成立したものであったとすれば，その組織の各々は悉く恣意的な意義をもち得るであろう。だが，言語においてはもとから法則と必然性が支配しているのであるから，これは真実ではない。もちろん，制定ということがまったく排除されているわけではなく，またそれはみずから自然にかなったものになることができる。これはプラトンが同様にすでに議論したところである。したがって，一つの言葉には，もともとはそこにはなかったが,自然にかなった仕方でその根本的意義に結びつく，確固たる哲学的概念が与えられることがある。しかしながら，言語形成においては同時に，逆の種類の制定もともに作用する。著しい実例を挙げるなら，そのようにして南海の幾つかの島においては，新しい君主の就任の際や類似の機会に，多数の言葉が廃止され，それに代わって新しい言葉が導入される（ヴィルヘルム・フォン・フンボルト『カーヴィ語』[14] 第二巻，

---

[12] θέσειは女性名詞θέσις〔1．置くこと，2．配列，配置；位置，立場，3．定立〕の単数与格の形。

[13] φύσειも同様に，女性名詞φύσις〔1．生まれ，素性，2．性質；本性，3．自然，etc.〕の単数与格の形で，φύσειあるいはἐκ φύσεωςで「生まれつき」「本来」の意味を表す。

[14] Wilhelm von Humboldt, *Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java, nebst einer Einleitung über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues*

295 頁）。現代の化学者がその材料を命名するやり方は，このような奇妙な種類の言語設定にくらべて，負けず劣らず恣意的である。そのような奇抜な行為は，しばしば理解を逃れているにもかかわらず，解釈学そのものが解明しなければならないところの，病的な現象である。自然には言語の各々の形成にただ一つの意味が基礎となっており，そこからそのすべての異なった意義が導き出せる。けれども，あらゆる言葉とあらゆる構造には一つの根本概念がある，と言うことはできない。なぜなら，一つの概念は定義づけられなければならないが，いろいろな言語形成の根本的意義は決して定義づけられないからである。つまり，根本的意義は一つの直観（Anschauung）なのである。

そこから判明してくるのは，言語の諸要素が同一の根本的意義を有しつつ，それにもかかわらず，いかにして同時に多義的でもあり得るか，ということである。すなわち，同一の対象はさまざまな仕方で直観されるので，それはまたさまざまな仕方で表示される。そしてこの場合，複数の対象が同一の直観のもとに属するので，それはまた同一の言語的表現によって表示されることができる。同音異義語（Homonymen）と同義語（Synonymen）の可能性は，これに基づいている。「同音異義語は同一の名称によって異なったものを意味し，同義語は異なった名称で同一のものを意味する」（homonyma iidem nominibus diversa significant, synonyma diversis nominibus eadem significant）。デーダーラインは，「教育的経験と修練」（エアランゲン，1849 年）という論文（彼の『公開講話』[15]［フランクフルト・アム・マイン，1860］292 頁以下に付録として再録されている）において，この概念を見事に論じている。彼は，同一の根本的意義を有しつつも，つ

---

und ihren Einfluß auf diegeistige Entwickelung des Menschengeschlechts, 3 Bde. (Berlin: Druckerei der Königlichen Akademie der Wissenschaften, 1832–1840).

[15] Ludwig Döderlein, *Oeffentliche Reden mit einem Anhange pädagogischer und philologischer Beiträge* (Frankfurt am Main: M. Heyder u. Zimmer, 1860).

まりここではSchliessendeの意義を有しつつも，異なる対象を表示するところの，Schlossのような言葉を，非本来的なあるいは見かけ上の同音異義語と呼んでいる。彼はまったく異なる語源から，それゆえまた異なる根本的意義から出発しながら，ただ偶然に音声上一致しているような，同じ音をもった言葉を本当の同音異義語と見なしている。例えば，ホメロスの用語においては，「限界」の意味のοὖρος（ὅροςの代わりに），「番人」の意味のοὖρος（ὁρᾶνと類似），「追い風」の意味のοὖρος（αὖραと類似），「壕」の意味のοὖρος（ὀρύσσωと類似），「山」の意味のοὖρος（＝ὄρος）がそうである。しかしながら，ひとはむしろこのような最後の種類の同音語を，見かけ上のあるいは非本来的な同音異義語と呼ぶことができる。なぜなら，ここではさまざまな対象がただ見かけ上，同一の語によって表示されるからである。もし鳥のStrauss〔ダチョウ〕（ラテン語のstruthio〔ダチョウ〕に由来）と花のStrauss〔花束〕が，偶然にも同じ響きをもっている，同じ名前で呼ばれるとすれば，この名前はまさに全く異なる語源に由来しているので，ただ見かけ上同一であるにすぎない。音はただその意義によって名前になるのであり，したがって異なった根本的意義をもった言葉は，本当は同じ名前ではない。本当の同音異義語は，これに従えば，「動物」の意味のζῶονと「画像」の意味のζῶονのように，異なった対象を同一の根本的直観によって表示したものであろう。各々の言葉はその多様な適用において，きわめて本来的に一連の同音異義的な名称を生み出す。にもかかわらず，ひとは表示された対象が異質的であると捉えられるときにのみ，同音異義的な名称をそのように名づける。例えば，このような同音異義的な名称は，カテゴリーに関するアリストテレスの書物の始めに，ὁμώνυμον〔同名のもの，同種のもの〕という言葉のもともとの論理的な意味のなかにもある。さて，これに対して，もし同義語が同一の対象を表示する異なった言葉であるべきだとすれば，この定義は類似の限定を要求する。そうでなければ，アリストテレスが前述の箇所で，σύώνυμον〔同じ名前のもの，同じ意味のもの〕という語の論理的な意味からこれを行っているように，ひとは人間と牡牛を同義語と見なすことができるであろう。というのは，両方の言葉によっ

て同一のものが，つまり動物という類が表示されるからである。ひとはこれらの言葉を同義語とは呼ばないが，それは人間の直観と牡牛の直観はあまりにも異なっており，また類は明らかに異なった仕方で呼ばれるからである。それゆえ，同義語とは同一の対象が異なった言葉で表示されたものであり，その根本的直観はわずかに異なっているものとして，あるいは全くもって異なっていないものとして捉えられる。かくして Pferd〔馬〕と Ross〔乗用の馬〕と　Gaul〔駄馬〕は，同義的と見なされるが，それはひとが根本的意義の相違について意識していないからである。相違はここで，Pferd（〔ギリシア語の〕παρὰ〔傍に，近くに〕とラテン語の veredus〔駅馬，駿馬〕から造語された parafredus）という言葉は外国語から借用されているが，他の二つの場合にはもともとの意義が曖昧になっている，ということである。もしひとが三つの言葉の根本的意義を意識していたとしたら，それらはたしかに同じ類を表示するとしても，しかしこの類の内部で，動物という類の内部における牡牛と人間のように，まさに異なった直観を表現するであろう。言葉の絶対的意味での同義語，すなわち徹底的に同じ意義の言葉，したがって同じ根本的直観の言葉というものは，存在しない。したがって，同音異義語は，一つの言葉の根本的意義を許容する，できるかぎりの相違を表し，これに対して同義語は複数の言葉の根本的意義の間のできるかぎりの接近を表す。

しかし言語形成の根本的見解は，異なった対象への適用によって直接的にだけでなく，間接的に一つの対象から他の対象への転用によっても，細かく区別される。このことは換喩（Metonymie）[16]，隠喩（Metapher）[17]，

[16] 修辞法の一つで，あるものを表すのに，これと密接な関係のあるもので置き換えること。例えば，「舌」で「言語」を，「角帽」で「大学生」を表す場合が，これに当たる。

[17] 修辞法の一つで，たとえを用いながら，表面的にはその形式（「ごとし」「ようだ」など）を出さない方法。例えば，白髪になったことを「頭に霜を置く」という類がそうである。

提喩（Synekdoche）[18] によって起こる。一つの言葉が，その根本的意義のおかげで，一定の対象を表示するために用いられるとき，その言葉は，この対象が諸特徴の一つによって一面的に直観されることによって，その対象がもつ諸特徴をも表示することができる。これが換喩である。アリストパネスは『鳥』718 行以下で次のように述べている。「でいやしくも未来についての判断と来れば，何でも鳥占ってわけなんだ，噂だって鳥占だし，くしゃみもお前さんらは鳥占って呼ぶ，出会いも鳥，声音も鳥，等々」（ὄρνιν τε νομίζετε παν θ' ὅσαπερ περὶ μαντείας διακρίνει· φήμη γ' ὑμῖν ὄρνις ἐστίν, πταρμόν τ' ὄρνιθα καλεῖτε, ξύμβολον ὄρνιν, φωνὴν ὄρνιν etc.）[19]。換喩はこれでもって滑稽に表示されるが，かかる換喩のおかげでὄρνις〔鳥，鳥占い〕は前兆という全く一般的な意味をもっている。鳥は古代人においてはきわめて頻繁に前兆と見なされるので，すでにホメロスにおいてあらゆる前兆は鳥と名づけられる。ひとはこの場合，他のすべての特徴，すなわち動物としての鳥の属性は度外視して，鳥を単に前兆を示すものとして見ている。bellum〔戦争〕の代わりに Mars〔軍神マルス〕が，Macedones〔マケドニア人たち〕の代わりに sarissae〔マケドニアの長槍〕が用いられるとき（『ヘレンニウスに与える修辞学書』[20] *ad Herennium* 4, 32 には「このよ

---

[18] 修辞法の一つで，全体（または一般的なもの）と部分（または特殊的なもの）との関係に基づいて構成された比喩。全体（または一般的なもの）の名称を提示して一つの名称に代え（「竜骨」で「船」を表す類），また一つの名を提示して全体（または一般的なもの）を表す（「剣」で「武器」を表す類）こと。

[19] アリストパネス，呉茂一訳『鳥』，高津春繁編『アリストパネス』世界古典文学全集，第 12 巻（筑摩書房，1964 年），221 頁。

[20] *Rhetorica ad Herennium*, translated by Henry Caplan, Loeb Classical Library (Cambrige, Mass.: Harvard University Press, 1954).『ヘレンニウスに与える修辞学書』*Rhetorica ad Herennium* は，紀元前 1 世紀に成立したローマ最古の体系的な修辞学の書物である。これは長い間キケロの著作と考えられてきたが，現在では擬作であることが判明している。ギリシアの修辞学理論を模倣したこの著作は，古典ローマの時代のみならず，中世ならびにルネサンス時代の修辞学理論に広範囲な影響を与えてきた。

うに容易にではないが，マケドニアの長槍はギリシアにまさっている」〔Non tam cito sarissae Graecia potitae sunt〕と記されている），事情はこれと似ている。その場合，ひとは軍神マルスということで，彼がその人格化であるところの，活動をのみ見ており，神の人格性を度外視している。しかしマケドニア人の槍においては，マケドニア部隊の無敵の力が見られる。さて，ひとが換喩において一つの対象に関して際立たせる直観が，同時に第二の対象において見出されるとすれば，後者は前者によって表示されることができる。この点に隠喩が存している。ライオンは特別に勇敢であると見なされるので，ひとはライオンのなかにもっぱらこの属性を見る。さて，この属性は人間においても見出されるので，英雄はライオンと表示されることができる。隠喩は換喩同様，比喩的な表現である。そこにおいて，一つの表象はそれ自体のためにではなく，それと結びついている別の表象のために，呼び起こされる。換喩の場合には，直観においてその対象と結びついている特徴の比喩として，比較から生じる隠喩の場合には，類似している別の対象の比喩として，ひとは一つの対象を設定する。両方の比喩において，一つの言葉はある対象の表象を介して，それとは区別されたものを表示する。これに対して，提喩は，ある対象の表象を介して，この対象と同じであるとか，あるいは似ているというだけでなく，部分的に同一であるところのものが表示される，という点に存している。部分の表示によって全体が，そして種の表示によって類が名づけられ，あるいはその逆である。全体と類の表象はまさに部分と種の表象を含んでいる。しかしもし部分が全体を表示するならば，全体に関してもっぱら件（くだん）の部分が直観されるのである。『アンティゴネー』の冒頭で，イスメーネーが「イスメーネー，大切な，血をわけた本当の妹のあなた」（ὦ κοινὸν αὐτάδελφον Ἰσμήνης κάρα）[21] と話しかけられるとき，話しかけられた人物全体は頭部のイメージのもとに直観される。頭部は直観のなかでは身体の主要部として優勢であ

[21] 邦訳ではこのように意訳されているが，ギリシア語原文にある“κάρα”は，文字どおりには「頭，頭部」を意味する。

る。これに対して，『アンティゴネー』の43行では手がアンティゴネーの人格に対する比喩として登場する。「その亡骸(なきがら)を，この手といっしょに持ち上げていくつもりか，どうか」(εἰ τὸν νεκρὸν ξὺν τῇδε κουφιεῖς χερί)[22]――ここでは直観全体は，作品を完成すべき手に集中している。エウリピデスの『ヒッポリュトス』661行では，「父上がお帰りになられたら」(ξὺν πατρὸς μολὼν ποδί)[23]はふたたび身体部分の足であり，重要なのはその活動であり，だからこそそれは主として直観のなかに立ち現れる。

さて，あらゆる言語要素の根本的意義が，このようにその同一性を失うことなく，きわめて多様なものへと細かく分化できるとしても，かかる根本的意義は，それぞれの個別的な適用の場合に，一方では言語の歴史的発展によって，他方ではそれぞれの表現が適用される圏域によって，その実際の限定を見出すのである。歴史的発展の経過においては，あるときは根本的意義のこの側面が，またあるときはあの側面がより強烈に際立ってくる。国民の性格，国民の諸部族への区分，諸部族の方言などは異なっているし，土地柄のさらなる影響と個々人はそのようにして直観に一定の方向性を与える。それぞれの言葉とそれぞれの構造にはその歴史があり，しばしばそのなかに民族の文化史が反映されている。例えば，ギリシア人の道徳的発展全体はἀγαθός〔よい，すぐれた，立派な〕という言葉の歴史のなかにその表現を見出す。その場合，それぞれの言語要素は現実のさまざまな圏域で適用され，それによってその根本的意義はさらに変更を加えられる。かくしてῥέζειν〔あることをすること，行うこと〕は，われわれ〔ドイツ語〕のthun〔行う〕に似た根本的意義をもっている。犠牲をささげる聖職者によって用いられると，これは「犠牲をささげる」という意味になるが，それはこれが聖職者の行う行為だからである。同様に，operariは礼拝においては「犠牲としてささげる」という意義を有するが，他方ではローマの軍人に適用されると，それは「堡塁構築作業を行う」ことを意味する。

---

[22] χερίは「手」を意味する女性名詞χείρの単数与格の形。

[23] ποδίは「足」を意味する男性名詞πούςの単数与格の形。

Χρηματίζειν〔商取引する，交渉する，用事を果たす〕は，商人の活動を表示することができる。すなわち，中動相で「金儲け」を表すが，政治家においてはそれは「公務の管理」，「政治的議論」，等々を意味する。こうしたいろいろな意義から，一見したところかなり異質な意義が発展する。Χρηματίζωはまた，「わたしがある名で呼ばれる」を意味する。その場合，つねに仕事の名称あるいは職務の名称が問題となっている。Χρηματίζω ’Αμμώνιοςといえば，それは本来的には，「わたしはアンモニオスとして商店を経営している」，「わたしはアンモニオス商店を経営している」，という意味である。そこからΧρηματίζειν は，その後一般的に，「称号を得る」とか「称号を受ける」を意味するようになる。例えば，Χρηματίζει βασιλεύς といえば，「彼は王の称号を受ける」という意味である。

したがって，文法的解釈はあらゆる言語要素をその一般的な根本的意義に従って，それと同時に，時代と適用の圏域とによってそれが被っている特別な限定に従って，理解するという課題をもっている。根本的意義は語源学（Etymologie）によって，すなわち複合語をその最も単純な構成要素の意義へと遡源することによって，見出されるべきである。しかしこの最も単純な構成要素の意義はいかにして見出されるのであろうか。絶対的な意味では，これは言語の語根である。さて，語根は純粋にそれ自体としては存在しないので，ひとはその意味を派生的な形式からのみ解明することができる。ひとはそれゆえまず，それ自体として存在している最も単純な派生語を解明し，そこから語根と複合語とを解明しようと努めるであろう。もちろん，単純な言葉の意味もまたしばしばより広範な派生語と複合語から明らかになる。それゆえ，ひとはつねに多かれ少なかれ合成された複合語から出発しなければならず，そしてこうした複合語の意味は言語の慣用（Sprachgebrauch）からのみ理解され得る。実際，複合語の意義をその構成要素の意義から導き出そうとするときですら，ひとは両者の関係をのちに確定するためには，両者を言語の慣用から突きとめなければならない。言語の慣用は，各々の語が適用されている個別の事例から明らかになる。各々の語はさながら意義の円周を形づくるが，ひとはそこから中心を，つまり

根本的直観を規定しなければならない。とはいえ，特殊な適用例は根本的意義からはじめて理解されることができるのであるから，ここにふたたび課題の循環が現れる。実際，ひとはしばしば特殊な意義を一般的なものと見なす危険に陥るのであり，それによってその後，さまざまに変更された意味を完全に間違って導き出すことが起こる。例えば，シュテファヌスの『ギリシア語宝典』*Thesaurus linguae Graecae*[24] のἐγκύκλιοςの項目においては，「通常の」(gewöhnlich）という意義がἐγκύκλιος παιδείαという特殊な表現から非常に無理矢理導き出されている。だがἐγκύκλιος παιδείαという表現は，アリストテレス以後にようやく現れるものであり，件(くだん)の一般的意義はアリストテレスにおいてとっくに用いられていた。辞書編集法の歴史は無数のそのような誤った処置を示している。なぜなら，辞書というものは，まさにいま述べたような仕方で，解釈学的活動によって成立するのであり，古典的言語の場合，言語の伝統が助け船を出してくれるとはいえ，それにもかかわらず，それは難しい場合にはわれわれを見捨てるからである。したがって，辞書はすでに正しく突きとめられたものをますます厳密に結合させることによって，つねに完全なものにされなければならない。表象が複雑に錯綜した道の上で，根本的意義の統一性を導きの糸として保持することは，しばしば法外に難しいものである。こうした関係においては，感覚的表象の微妙な変更が最大の困難を提供する。例えば，ὑγρός〔濡れた，湿った，しなやかな〕という形容詞は，その根本的意義に従えば，議論の余地なくὕω〔雨を降らせる，雨で潤す〕およびὕδωρ〔水〕と関連している。それは「液状の，よどみない」と「水分の多い」をも意味する。しかしὑγρὰ ὄμματαは「水分が多い目」ではなく，「切なげな眼差し」である。直観がここでは湿っぽい輝きに存していることはあり得ても，しかしὑγρὸς πόθοςという組み合わせでは，「切実なる要望」という意味になり，かかる表象は確定され得ず，むしろ流れるものという根本的意義から生じるのは，溶けるもの，柔らかなもの，それゆえ切なげなものという直観であ

[24] Henricus Stephanus, *Thesaurus Graecae linguae* (Geneva, 1572).

る。同時に，流れて行くものや沈んで行くものは，しおれたものやぐったりしたものとして現れることがあるので，『アンティゴネー』1179 行（Br. 1236）の ὑγρὸς ἀγκών，つまり「ぐったりした腕」はここに由来する。しかし柔らかなもの（例えば，ὑγρα χειλη，つまり柔らかな，膨らんだ唇）は，曲がりやすいものやしなやかなものをも表示し得るので，ὑγροιといえば，しなやかで敏捷な「舞踊家」や「レスラー」を意味する。流れるものは沸き立ち，波立つものとして現れるので，そこからὑγρὸν νῶτον（ピンダロス『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第一歌，9）という表現が由来する。これは眠っている鷲の穏やかに波状運動している背中，その柔らかな羽毛の虹色に光る運動を意味する[25]。最後に，波状運動するものはまた波状に形成されたものという意味で，ὑγρὸνと呼ばれる。すなわち，ὑγρὸν κέρας は「曲がりくねった角」であり，ὑγρὸς ἄκανθος は「美しく曲がったはあざみ」である*。ὑγρὸς という言葉と結びついている全体的直観は，明らかに一つのドイツ語によっては再現され得ない。そうした状況はいたるところにある。異なった言語の表現は一致しない。こうした全体的直観の統一性，つまり根本的意義も翻訳することはできず，ただ書き換えること，すなわちさまざまな側面について触れることができるだけである。そして異なった多くの適用例に個別にあたって，生き生きとした実質的な直観を獲得しようと努めることによって，それは再生されるのである。それゆえ，もしひとが直観の連関が失われるほどきっちり整えられた論理的推論によって，一つ

---

[25] 当該箇所は，英訳では“And as he slumbers, he ripples his supple back, held in check by your volley of notes.”となっており（*Pindar 1. Olympian Odes, Pythian Odes*, edited by G.P. Goold, The Loeb Classical Library, no. 56［Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1997］, p. 213），邦訳では「まどみつつかの鳥は，なんじの響きのとりことなって，その背をしなやかに波打たせる」と訳されている。ピンダロス，内田次信訳『祝勝歌集／断片選』（西洋古典叢書）京都大学学術出版会，2001 年，112 頁。

* 『ピンダロス全集』（1811-21），tom. I, pars II, p. 227 seq.を参照のこと。

の意義を他の意義から導き出すとすれば，それはまったくのお門違いである。『アンティゴネー』1036行（Br. 1081）の「犬が〔屍を〕さんざに引き裂いて葬いをし」（ὅσων σταράγματ’ ἢ κύνες καθήγισαν）において，καθαγίζειν は，それ以外の場合には「聖別する，浄祓する」（verweihen）の意味であるが，ヘシキオスによれば，「よごす，汚染する」（verunreinigen）を意味すべきである。ゴットフリート・ヘルマンはこれを以下のように伝えている。すなわち，一つの場所が聖別されることによって，俗なるものは遠ざけられる。それゆえ，聖別することは，ひとが宗教的な畏れゆえにある場所から遠ざかるという事態を引き起こす。犬によって引きずられてきた死体の一部による汚染も同様の事態を引き起こす。したがって，ここのκαθαγίζειν は，「汚すことによって，誰でもが自制するようにすること」（contaminando facere ut quivis se abstineat）を意味する，と。そのような解釈は，本来的には，当該箇所の文脈からの抽象的な推測にすぎない。しかしその言葉がここで用いられる範囲は，ここではそれがギリシア人によって死者の奉献という特殊な意義でのみ理解されることができた，ということを指し示している。さて，かかる意義においては，それはその文脈によって，「その引き裂かれた肢体に犬が埋葬の儀式を施す」* という辛辣な苦みを獲得する。ゴットフリート・ヘルマンは，直観によってのみ把握され得るものを概念的に演繹しようとすることによって，その解釈において度々思い違いをしている。例えば，『コロノスのオイディプス』1086行（1825年版）におけるθεωρεῖν についての彼の解釈を参照されたい。ちなみにここでいろいろな言葉によって示されていることは，まさに語順の構成と種類にもあてはまる。すなわち，根本的意義はいたるところで直観によって理解されなければならず，文法的な揚げ足取りによって規定されてはならない。それゆえ，ギリシア語を解釈する際に，省略的な言い回しを仮定して，それを悪用してきたことは，言語についての直観の欠如に基づいている。ギリシア語に省略的な表現が存在することは論争の余地がないが，

---

* 1843年の『アンティゴネー』の版の277-278頁。

かかる表現はその場合，直観的な仕方でそのようなものとして特徴づけられている。例えば，「同じように」（ἀπο τῆς ἴσης）という言い回しにおいては，この女性名詞は，あるものが補われ得るということを示している。すなわち，── それ以外の用語法から明確に判明するように ──μοίρας〔μοίρα の属格：運命の女神の〕である。これに対して，「目を切り取られた」（εκκέκομμαι τὸν ὀφθαλμόν）や，「～して以来，～の後」（ἐξ οὗ）のような表現においては，省略を仮定することは間違いである。受動相における対格の τὸν ὀφθαλμόν には，例えば〔前置詞〕κατά〔～に関して〕が補完されずとも，能動相の場合と同じ直観が基礎になっている。同様に，ἐξ οὗ の場合には，何らかの仕方で一目瞭然に，χρόνου〔χρόνο の属格：時の〕が補完されるべきであろう，と認識されるわけではない。οὗ は〔ドイツ語の〕seitdem〔それ以来〕のなかの関係詞と同じように，単純に中性名詞として把握されなければならない。ゴットフリート・ヘルマンは，彼が編集したヴィゲルス［Franciscus Vigerus, 1591-1647. ベルギーのイエズス会士。］の『ギリシア語の話し方の特殊な慣用語法についての書』de praecipuis graecae dictionis idiotismis liber（第二巻，ライピツィヒ，1813 年）869 頁以下において，省略についての間違った仮定に対する反論を，非常に見事に表明している。しかし彼自身が特殊な偏愛をもって適用する解釈方法は，ひとしく直観を欠いた言語理解に基づいている。これは二つの異なった構成が混合していると仮定することによって多くの構造を技巧的に解釈するやり方で，いわゆる「組成上の混同」（confusio constructionum）と呼ばれるものである。ひとが構造を正しい視点から直観する術を理解するやいなや，ここでは一見混乱と見えるものが大抵は取り除かれる。

しかし言語形式の根本的意義が明瞭性へともたらされることができ，その多様な分岐において保持されるのは，〔その根本的意義が〕多様に分岐する際に，言語の歴史的発展と適用領域によって制限されていることが正しく認識される場合に限られる。このためには専門知識が必要であり，そしてここで文献学の形式的部分と実質的部分との間の相互作用が浮かび上がってくる。例えば，δόξα〔臆見，想念，名声，名誉，栄光など〕という語

は，ピタゴラスやプラトンにおける哲学的用語法において，いかなる意義を有するかは，哲学の発展の歩みとこの二人の思想家の個人的な思想体系からのみ理解することができる。しかしこの知識は彼らの教えから獲得されなければならない以上，このことは種類的ならびに個人的解釈を前提とする。他の場合には，歴史的解釈が前提とされる。かくしてἡ θεός といえば，アテナイではそれ以上の付加語がなくても，通常は女神アテーナーを意味する。これは歴史的に容易に説明のつく制限である。そこでプラトンの『国家』の冒頭でソクラテスが，「わたしは昨日神を崇拝するために(προσευξόμενος τῇ θεῷ) ピレウスに行きました」と言うとき，ひとはアテナイの語法に従って，まずアテーナーの祝祭のことを考えるであろう。だがしかし，ここでは文法的解釈は十分ではない。〔この場合には〕アルテミスの祝祭が問題だからである。これはソクラテスがその言葉を語る歴史的な周辺の事情を考慮することによってのみ突きとめることができる。これが歴史的解釈の課題である。さまざまな解釈方法のこのような共同作業において，解釈学的循環が回避されるべきであるとすれば，ひとは一般的な語義の制限を，ヘルマンがκαθαγίζειν についての上述の解釈において行っているように，その事実的連関が正しい文法的解釈に基づいてのみ認識されうるような，そのような適用の事例から推測してはならない。ひとはむしろ各々の事例に対して，類似の事例によってその語法を確定するよう努めなければならない。一つの言語的記念物のそれぞれの箇所の解釈は，可能なかぎり並行箇所に支えられていなければならない。こうした並行箇所の証明能力は，当然のことながら，それが解釈されるべき箇所に対してもっている，親縁性の度合いに左右される。そしてこの親縁性は一定の尺度に従って段階づけられている。明らかに，それぞれの著者はみずから自身と最も身近な親縁性をもっている。それゆえ，各々の著者の語法はまず著者自身から解明されるべきである。これに関してひとがいかに処理しなければならないかを，ハインドルフ［Ludwig Friedrich Heindorf, 1774–1816.ドイツの古典文献学者。］によるプラトン的対話の模範的な解釈が示している。彼はプラトンの真正の文献学的解釈に対して最初のより堅固な基礎を据えたので，それゆえ，あらゆる後代の有意

義な業績にもかかわらず，名声は彼のものであり続けている。* ある著者が他の著者たちともっている親縁性，つまり彼らの語法の類似性は，まず彼らがお互いにそのうちに立っている個別の状況によって制約されている。他者のなかにすっかり溶け込んでいる著作家は，他者の語法を規定するために，まずは利用され得るであろう。もしある著者の模倣者たちがこの著者に完全に沈潜しているとすれば，この関係ではとくに著者の語法にとって，こうした模倣者たちが重要である。逆に，いろいろな模倣作は，当然のことながら，原作から解明されるべきである。ある著作家あるいは思想家の文法的解釈に対する証拠箇所として，著者の語法のより正確な知識がそこで前提とされているところの，他の著作家たちの引用や説明がこの種の並行現象に連なる。かくしてわれわれは，クセノフォンとプラトンからソクラテスの語法を，アリストテレスからプラトンの語法を解明しなければならないであろう。この関係では，言語の生き生きとした伝統が彼らの役に立つ限りにおいて，古代の解釈者や文法家たちが大きな価値を有している。当然，ここではこうした解釈者たちが間違って解釈しなかったかどうかが，つねに検証されるべきであり，そして同様の慎重さは，あらゆる模倣が原作の一定の解釈を前提としている以上，模倣家たちの場合にも必要である。語法の個人的親縁性と並んで，次から次へと同じ思想傾向をもち，同一の伝統に連なる，同じ発話のジャンルに属する作品間に存在する類似性が，考察の対象となる。それゆえ，ある叙事詩人の語法に対しては他の叙事詩的作品から，ある雄弁家に対しては他の雄弁家から，並行箇所が探し求められるべきであろう。個々の発話のジャンルにおける語法の一般的な親縁性は，相互に遠く隔たった時代に執筆した著作家たちのもとで見出される。しかしもちろんその際に，一般的な歴史的諸関係が空間と時間に従って及ぼす影響が，つねに含めて考慮に入れられなければならない。この点では，ある著作家の語法に対しては，最も近い並行現象は同時代人

* ハインドルフ版のプラトンの『対話篇』についての批判を参照されたい（『小品集』第七巻，46 頁以下，ならびに 79 頁）。

たちから取り出されるべきであろう。そして彼らのなかでもまず，空間的に最も近い言語グループから，すなわち同じ方言あるいは同じ定住地に属する人々から取り出されるべきであろう。比較される言語的作品が，このような一般的な歴史的関係のうちで，お互いに隔たっていればいるほど，並行箇所の証明力はますます乏しくなる。

解釈する際に，こうした尺度に対する違反がしばしば馬鹿げた仕方でなされてきたのは，ひとがすべてのことを混同したからである。例えば，正しい道がここでは十分明確にあらかじめ示されているにもかかわらず，ひとは新約聖書の語法をポリビオス［Polybios, c.200-c.120 B.C.古代ギリシアの歴史家。ローマの発展を中心とした『歴史』40巻を著したことで知られている。］やアッピアノス［Appianos 2世紀に活躍したアレクサンドリア生まれのローマの歴史家。主著『ローマ誌』Romaikaは，ローマの征服した土地について書いたギリシア語の著作で，24巻からなっていたが，その半数は失われてしまった。］や，それどころかホメロスからすら解明してきた。正しい道とはすなわち，まず各新約聖書記者の言語をそれ自体として考察し，そののちに彼らを相互に比較することである。そのつぎにセプトゥアギンタ，アポクリファ，ヘブル語聖書，さらに同時代のギリシアの著作家たち，とくにアレクサンドリアの著作家たちが考察の対象となる。新約聖書の場合には，同時に，一つの言語の内部における語法が他の言語から解明され得る事例が存在している。このことによって新約聖書の諸書の解釈はまったく特別に困難になる。ここで適用されるギリシア語の根本的直観は，ヘブル語のなかに探究されるべきであり，したがってギリシア語の語法と調和させられるべきではない。例えば，δικαιοσύνη〔正義，公正〕という言葉は，共和政体の意味におけるギリシア人のもとでは，法的な資格をもった各人に応分の持ち分を与える，という心術を意味する。さて，ユダヤ人はこの言葉のなかに宗教的ならびに神政政治的意味を入れるので，それは神の誡めに対する従順を意味し，それゆえ，例えば異邦人に対する慈善もまたそのもとで把握される。その上，いろいろな言葉の，ギリシア語の語法から逸れた，制限された意義は，新約聖書の宗教的な著作家たちによって，拡大されるというよりもむしろ深められる。宗教的な意味はまったく特別の言語を形成する。いろいろな言葉はかかる宗教的な意味によって，まったく新しいがしかし深く内的な関係ゆえに，解明しにくい特質を得る。ちなみに，語法の

解明のために外来語に立ち帰らなければならない各々の場合には，異なった言語の言葉はぴったり重なり合わないので，文法的な理解は困難になる。ラテン文学はギリシア文学に依拠しているために，ギリシア語を引き続き顧慮することを要求する。ギリシア語の語法は，アレクサンダー大王以降はオリエントの言語によって，ローマ支配以降はラテン語によって，影響されている。ポリビオスにおいてστρατηγός〔（ローマの）属州の長官〕[26] と，そしてディオ・カッシウス［Dio Cassius. c.155–230 以後．Cocceianus とも呼ばれる。ローマの政治家・歴史家。220 年頃，そして再度 229 年に執政官を務める。主著はギリシア語で書かれた 80 巻本のローマ史。］において δημαρχικὴ ἐξουσία〔護民官の権限〕[27] と言われているものは，これらがラテン語の praector と tribunicia potestas という表現の翻訳であるとわかったときにのみ，理解することができる。そして同様の仕方で，すべてのローマの国家概念と法律概念はギリシア語で言い表されている。

きわめて広範囲にわたって，古代語と親縁的な近代語および比較言語学一般が，文法的解釈の補助手段として役に立つ。例えば，ホメロスにおける少なからぬ箇所が，近代ギリシア語の言語的伝統によって依然としてその解明を見出す。コレイ［Coray.または Adamantios Coraës, 1748–1833.ギリシアの学者・愛国者。1788 年以降，亡くなるまでパリに在住。古代のギリシア文明の遺産の研究に熱心に取り組んだ。］は，たとい彼が度を超して伝統の拡大を行っているとしても，彼が編集した『イリアス』の版において，これについての見本を提供している。そこで今日でも依然として注目すべき仕方で，船索（Schiffstau）は近代ギリシア語で ποδάρι と呼ばれる。そしてわれわれはそこから，すでにホメロスが πούς〔足〕でもって表示したところのものについての直観を獲得する。* ギリシア人の技術的表現は，それどころかラテン語の仲介によって，ロマンス語からも解明されることができる。例えば，別の種類の船索（das Rack）はギリシア語では ἄγκοινα と呼ばれる。ラテン語の anquina はこの言葉に

---

[26] στρατηγός は通常「将軍，司令官」を意味する。

[27] δημαρχικὴ は δήμαρχος（δῆμος〔民衆，庶民〕の長）から派生した形容詞，ἐξουσία は「権力，権能，権勢」の意。

*「アッティカ国家の海事についての古文書」，153 頁。

倣って作られており，そこから中世ラテン語の anchi，イタリア語の anchi あるいは anchini，フランス語の les anquins が由来している。** ギリシア語の λιθάργυρος が表示するところのものを規定するためには，ひとは同様にイタリア語やフランス語の力を借りる必要がある。イタリア語の litargio やフランス語の litarge は，一酸化鉛を意味するが，この意義は lithargygos〔(英) litharge, lead monoxide；一酸化鉛〕に関する古代の報告に合致している。*** それにもかかわらず，ひとはそのような並行現象において，その言葉が民衆的に純粋な伝統によって近代語のなかに入ってきたのか，それとも学問的な回復に基づいているのかを，調査する必要がある。例えば，民衆の間で「高み」を意味するタウヌス山地は，学者たちによってはじめて，タキトゥスに出てくる名前でふたたび表示されるようになった。ロマンス語がラテン著作家たちの解釈のために多様な仕方で引き合いに出され得るということは，自明のことである。しかしギリシア語に対しても，ロマンス語と一般に近代語は，とくに構文と言い回しとにおいて，いろいろな類比を提供する。かくしてフランス語の「われわれフランス人，われわれ女性」(nous autres Français, nous autres femmes)〔という言い回し〕は，ギリシア語の「神々と他の女神たち，男たちと他の女たち」(ὁι θεοὶ καὶ αἱ ἄλλαι θεαί, οἱ ἄνδρες καὶ αἱ ἄλλαι γυναῖκες) と完全に類比的である。無数に存在するそのような並行現象は，一定の点での語法がギリシア語あるいはラテン語に特有なものか，あるいはより一般的な性格をもっているかどうか，についての判断をもたらす。とくにその起源が古典語を超えたところにある語根の意味は，すべての親縁的な言語との比較によってのみ突きとめることができる。ここでふたたび課題の無限性が示される。特別な意義を見出すためには，ひとは一般的な根本的意義を尺度として据えなければならない。そして多様なものの統一としての尺度は，単に古代の古典的言語においてのみならず，すべての親縁的な言語における

**「アッティカ国家の海事についての古文書」，152 頁。

***アッティカにおけるラウル銀山について（『小品集』第五巻，25 頁)。

個別的な適用の無限性からのみ判明する。完全な帰納的推理は可能ではないので，ひとは並行的な事例をできるだけ幅広く引き寄せることで満足しなければならない。そうした事例を一覧的に編成することは，辞書編集法の課題である。帰納的推理の間隙を満たすのは，最終的には正しい言語感情である。しかしこの感情は，ひとが言語の精神にすっかり溶け込んでいるときにのみ，正しく決断することができる。これはあらゆる言語的現象についての包括的知識によってのみふたたび可能になるものである。したがって，言語感情が絶えざる修練によって完全なものとなればなるほど，何かある言語要素についての完全な理解は決して達成できないということを，ひとはますます自覚し続けなければならない。なぜなら，ひとつの国民の精神をその言語においていつか完全に把握するなどと，不遜にも敢えてできる人は誰もいないからである。

われわれのこれまでの考察の結果は，あらゆる言語要素の意義は，ひとつにはその語源によって，ひとつには語法によって規定されるということ，そして語源自体は言語の慣用からのみ理解されるということである。それゆえ，いたるところで言語の慣用が重要である。われわれが言語の慣用から解明することによって，われわれは，同時代人たちが理解したように，あらゆる作品の言語を解釈するのである。解釈の非常に重要な基準はここに存している。すなわち，ひとは同時代人たちが理解できなかったような仕方では，いかなるものも解釈してはならない，ということである。もし言語の慣用が正しく認識されておれば，すべてのことは母国語におけるのと同じように，第一印象によって文法的に明白であらざるを得ない。わたしはこのことに一番の重要性を置いている。なぜなら，古代人もまた，まず文法的な細かい事柄に拘ることなしに，第一印象からのみ理解することができたからである。

2．言語的要素の連関からの語義の規定

イギリスの詩人ポープ［Alexander Pope, 1688-1744.イギリスの詩人。代表作の一つに『人間論』Essays on Man（1733）がある。］は，ある機会に以下のように述べた（リヒテンベルク『雑論集』第四巻，311 頁〔1844 年

版，第五巻，68頁〕)。すなわち，「辞書編集者はたしかに一つの言葉の意義を個別に知ることができるかもしれないが，しかし二つのものをその結合において知ることはできない，ということをわたしは容認するものである」。これは多くの場合にあまりにも真実であることが実証されている，強烈に含蓄のある言葉である。だが，文法的解釈の成果を一覧表にまとめた辞書編集者たちは，言葉と構造を孤立的にのみ考察するのであるから，通常は悪しき解釈者である。しかし辞書編集法がその一分野である文法学一般は，あらゆる言語形成の意義を，それ自体としてまた一般的に，つねに正しい解釈からのみ確定することができる。たとい文法学がこの課題を完全に解決したとしても，それにもかかわらず，ひとは個々の場合に，語義が固有の活動によって，言語的環境から，すなわち連関から，最終的に限界づけられているのを見出さざるを得ないであろう。

言語の音声的要素は，その意義に従えば，実質的要素と形式的要素とに分かれる。いろいろな直観の内実を表現する前者は，名詞，動詞，そしてそれに続いて，形容詞と副詞である。直観の内実のいろいろな関係や結合を表示する形式的要素は，活用形（Flexionsformen）と不変化詞（Partikeln）という二重の性質を有している。前者は実質的要素と融合しており，後者はそれ自体として存在している言葉である。連関は，ひとつにはその直観内実が結びついている実質的言語要素を単にまとめ上げることのうちに，ひとつには内実の結合がそれによってより厳密に規定されるところの，実質的要素と形式的要素とをまとめ上げることのうちに存している。両方の場合に，語順の性質が同時にともに作用している。

語義が純粋に実質的な連関によっていかに規定されるかということを，一つの単純な事例が示している。pater の意義は pater filii〔息子の父〕と pater patriae〔祖国の父〕においては異なったものである。そしてこのことは言葉の形式にではなく，filii と patriae の意義の実質的相違に存している。このような諸要素の相互的制約においては，必要であるにもかかわらず，それ以外の語法を考慮することなく，一つの言葉に周囲の状況に合致する一つの意味をこっそり押しつける，という危険性がすぐ頭に浮かぶ。

『アンティゴネー』の上述の箇所（原文100頁）におけるκαθαγίζειν についての間違った解釈が，一つの実例を提供している。ヘシキオスは，あるいはむしろ同人の保証人は，ここではこの言葉は「よごす」という意味でなければならないと，明らかに前後の連関からのみ助言した。σταράγματα καθαγίζειν は「引きちぎられた亡骸を（動物が）食べる」という意味であると，ひとは同じくらい上手い助言をすることができるであろう。

活用形においては，連関（文脈）がまず語形変化のしるしそのものの意義を規定するが，語形変化のしるしは，実際，実質的言語要素と同じほど多義的である。例えば，amor patris という表現において，属格形が目的的（父への愛）に理解されるべきか，それとも主語的（父の愛）に理解されるべきかは[28]，文脈次第である。anno が与格であるか奪格であるかは，同様に文脈のみが教えることができる。ここで構造，すなわち活用形とその周囲との結びつきは，結合における実質的言語要素の意義によって，解明されなければならない。だが，構造はまさに実質的要素間の連関を表示すべきであり，したがって実質的要素の意味を制約する。これによってふたたび一つの循環が成立し，これが一つの言語を習得する際に，初期の学習をまったく特別に困難なものにする。初学者において最も頻繁に起こることは，彼らが構造を間違って理解したために言葉の意味を間違って解釈する

[28] ラテン語においては，動作や感情を表す名詞は，通常，意味上目的語に当たる言葉が属格の形で付加される。例えば，studium litterarum〔文学への没頭〕や odium tyranni〔暴君への憎しみ〕がその一例であるが，このような用法は「目的の属格」あるいは「目的語的属格」（genetivus objectivus）と呼ばれる。他方で，動作や感情を表す名詞はまた，属格の主語をも取り得る。すなわち，ira domini は「主人への怒り」のみならず，「主人の怒り」をも意味するし，laudatio Ciceronis は「キケロの賞賛演説」（キケロが誰かを賞賛する）と「キケロへの賞賛」の両方を意味し得る。後者の用法は「主語的属格」（genetivus subjectivus）と呼ばれるが，どちらに解すべきかは，ベークも述べているように，まさに文脈による。松平千秋・国原吉之助『新ラテン文法』第3改訂版（南江堂，1977年），64-65頁，中山恒夫『古典ラテン語文典』（白水社，2007年），191頁参照。

ことと，その逆のケースである。しかし最も精通した人にとっても循環を回避するのが難しい場合が無数に存在する。著者みずからが活用形と構造との本来的な意味を完全には理解していない場合には，すべてのことは不明確となる。例えば，新約聖書記者たちは，ギリシア語の格，時称，受動相，中動相などの区別について，きわめて不明瞭なイメージをもっている。ここではしばしば，ある形式をギリシア語から解明すべきか，それともヘブル語から解明すべきかわからないことがあり，それゆえ少なからぬことがほとんど明晰性へともたらされない。

活用形は言語要素の最も近い連関に関係する。しかし通常ひとはこれをより広い周囲からはじめて理解することができる。これに関して不変化詞が最も本質的な補助の役割を果たす。例えば，不変化詞の一つである前置詞は，活用形の意味をより厳密に規定する。多くの副詞，間投詞，そしてとくに接続詞といった他のものは，文章全体ならびに文章群に関係し，さながら連関を遠くにまで運んでいく。もちろん，不変化詞もまた多義的であり，同様に文脈からその意味を獲得するので，解釈学的循環（der hermeneutische Cirkel）は不変化詞によって決して完全に開くことはない。にもかかわらず，言語が明瞭であればあるほど，その言語は不変化詞に関してますます豊かである。例えば，ギリシア語はその不変化詞の豊かさによって，きわめて繊細かつ錯綜した理念の結びつきを表示することができるが，これに対して不変化詞の数が乏しいために，最も普遍的な思想的関係をほとんど表現することができないヘブル語は，幼時の段階に立ち止まったままである。それゆえ，この関係においても新約聖書の言語は，ヘブル語に依拠しているために，大きな困難を提供する。初期キリスト教著作家たちのなかで，ギリシア的な文章構成に最も近づいた人は，重要なギリシア文化の都市であったタルソ出身のパウロである。これに対してペテロははるかにヘブル的である。しかしながら，パウロの言語においても十分混乱が見うけられる。なぜなら，たとい彼が新約聖書の他の記者たちよりも比較的上手く教育的言語を操る術を心得ているとしても，彼はその形式をきわめて不完全にしか把握しなかったからである。ヨハネにおいては，

次々と連なる文章の基礎に，いたるところで統一性としての高次の理念がある。ひとはこの理念を著者の個性からのみ解明することができる。ここでは文法的解釈は，それゆえ個人的解釈によって補完されなければならない。一般的に，こうしたことは圧倒的に主観的な思想傾向をもった著作家において生じるが，例えば，叙情詩人たちやタキトゥスやセネカのような個人においてそうであるように，彼らはきわめて僅かの不変化詞を用いるのを常としている。不変化詞はここでは，文章の主観的な色彩や関係を表現するために，感情の深みにまで及ぶものではないので，これらは相互に無媒介に立ち現れ，いたるところで飛躍を指し示す。その場合，思想の構成は句読法（Interpunction）によってのみ暗示されるが，しかし句読法も多義的であり，ふたたび文脈からのみ解明されなければならない。ここで連関が個人的解釈の助けを借りてのみ理解され得るということを，われわれはタキトゥスから引き出したできるだけ簡単な事例で示したいと思う。『年代記』Ⅰ，3には，以下のように語られている。「本国では事態は平静であった。官庁の名称は同一であった。若者たちはアクティウムの勝利ののちに生まれ，きわめて多数の老人たちも市民戦争のさなかに生まれた。国家を見たことのある生き残りはいかに少なかったことだろう。」（Domi res tranquillae; eadem magistratuum vocabula; iunores post Actiacam victoriam, etiam senes plerique inter bella civium nati; quotus quisque reliquus qui rem publicam vidisset!）[29]。四つの繋がりのない文章の連関は，しかしひとがこの著作家の個性を知るときにのみ，すなわち全体が風刺的な辛辣さで貫かれていることを知るときに，その実質的内実から判明

[29] 参考までに，この引用箇所を英訳で示しておく。“At home all was calm. The officials carried the old names; the younger men had been born after the victory of Actium; most even of the elder generation, during the civil wars; few indeed were left who had seen the Republic.” Tacitus, *The Annals*, translated by John Jackson, The Loeb Classical Library no. 249 (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1962), p. 249.

する。最初の文「本国では事態は平静であった」(Domi res tranquillae)は，後続の文によって根拠づけられる。国内には平和があった。なぜかといえば，名目上は，たしかに同じ役所が存在した。そして共和政体のこのような単なる見せかけは，平穏を維持することに満足していた。しかしこのことは，若者たちがアクティウムの戦い［アクティウムはアンブラキア湾の西の入り口にある，ギリシア西部の岬であるが，ここで紀元前31年，オクタウィアヌスがアントニウスとクレオパトラの連合軍を打ち破って，ローマの内乱に終止符を打った。］ののちにはじめて生まれたこと，それどころか大半の老人が市民戦争の時代に生まれたことから，説明がつく。かくして，ごく僅かの人が古い体制をみずからの経験で知っていた。ひとは卑屈な形式に慣れ親しみ，失ってしまったものに気がつかず，かくして平静に振る舞っていたのである。もしタキトゥスがこの連関を不変化詞を用いて表示したとすれば，全体の印象は弱められたことだろう。まさにぶっきらぼうに文章を並べることで，思想の主観的色合いが指し示されるが，しかしかかる主観的色合いからのみ連関は理解され得る。

種類的解釈もまた，文法的連関を規定するために，しばしば動員されなければならない。例えば，悲劇においては，すべてのことは全体的理念を指し示さなければならず，また全体の光のなかで現れなければならない。それゆえ，ここでは個は文法的にもしばしば芸術作品の全体性からのみ理解され得る。連関が不変化詞によって表示され得ないような場合，明らかに連関はその最も外的な拡張において考慮されるべきである。しかし全体の連関がそこから生じてくるところの，芸術作品の統一性は，種類的な解釈によって突きとめられるべきである。例えば，ソポクレスの『アンティゴネー』23行以下において，クレオン［テーバイの王。オイディプスの妃で母のイオカステーの兄。］がエテオクレス［オイディプスの子。ポリュネイケスの弟であり，イスメーネーとアンティゴネーの兄。］をいわゆる公正な正義をもって(δίκῃ δικαίᾳ)埋葬した，と言われるとき，解釈者はここに類語反復(トートロジー)を見てきたが，他方でこの表現はこの作品の理念から容易に説明される。この作品においては，すべてのことは自然の掟と人間の定めた条例との間の対立をめぐって展開している。アンティゴネーはその言葉において，ひとは人間の定めた条例を正しい法律と見なしているが，それに対してポリュネイケス［オイディプス王の子。祖国に弓を引いてアルゴスの軍勢とともにテーバイを囲み，ついに弟エテオクレスと一騎打ちをし，兄弟共倒れとなった。］をも埋葬するよう命じた記されざる法律

を正しい法律として認めていない，と嘆いている。*

連関からなされる文法的解釈は，結局は次のようになる。すなわち，言語のすべての要素は，ひとつにはみずから自身によって，しかしひとつには全体の連関によって，つまり著者と作品との性格によって，交互に制限され，そしてそのようにして，語法上可能な多数の意義のなかから，制限を用いて，つまり爾余のものの否定（στέρησις〔奪取，剝奪〕）を用いて，つねに積極的な根拠をもっている本当の意義が，選別されるのである。もしこれに対して必ずしもすべての条件が与えられていないとすれば，欠けているものは，批判の途上で獲得され得る仮説によって，代用されるべきである。そのような仮説に基づいた，したがって仮説的な解釈は，断片を解釈する際には必ず起こる。というのは，断片においては，より一層の連関が補完されるべきだからである。ここではときにいかなる文法的要素も知られていないこともある。例えば，『ギリシア碑文集成』*Corpus Inscriptionum Graecarum* の No.1 の場合がそうである。そこでは仮説的解釈によって，いまではほとんどすべてのことが確実なものになっている。こうした仕方でいかに多くのことが成し遂げられ得るかは，エジプトのヒエログリフの解読が示している。ひとは tabulae bilingues〔ちんぷんかんぷんの書き物〕によって，文字の意義についての仮説を得た。そしてコプト語と古代エジプトの言語との親縁性についての別の仮説に基づいて，言語要素の意義を確定することに成功し，それによってその後ふたたび別のものが規定されたのである。このように，それに関してはすべてが未知であった記念物が，仮説的解釈によって一部は完全に解読されている。

II．歴史的解釈（Historische Interpretation）

§22．解釈学が客観的な語義に関して，あたかも文法的解釈によって汲み尽くされるかのように見えることもあり得るだろう。なぜなら，われわ

* 1843 年版の『アンティゴネー』，217 頁を参照されたい。

れの定義に従えば，解釈学は対象そのものの理解であるべきであるが，しかし文法的解釈は客観的な語義そのものを探究するからである。しかしながら，解釈学の対象として，われわれはここで言語的記念物を考察する。しかし言語的記念物そのものを理解するためには，客観的な語義そのものを知ることでは十分ではない。むしろ言語的記念物そのものの意義は，一部は言葉そのもののうちにはないが，しかし現実的事態への関係によって，その客観的意味に結びついている，いろいろな表象に存している。この側面から言葉を理解することを，われわれは歴史的解釈の課題として表示してきた。語り手あるいは書き手は，意識的にあるいは思わず知らず，自分が向き合っている当人たちが，自分の言葉を文法的に理解するだけでなく，その言葉がそれ自体として述べる以上のことを，それによって考えるということを前提としている。なぜなら，その言葉が述べる内容は，歴史的に与えられた事態との現実的結合のうちにあり，したがってあらゆる専門的知識の所有者にその事態を思い起こさせるからである。文法的解釈が規定するような客観的な語義そのものは，みずから歴史的解釈が突きとめる必要のある暗黙の諸前提の結果である。ひとは著者の見地に完全に身を置くためには，このような目的のために，あらゆる関係において，言語作品において取り扱われる事柄(Sache)を知らなければならない。解釈者が専門知識(Sachkenntniss)をもっていればいるほど，解釈者は著者をより完全に理解するであろう。ここでは歴史的状況についての知識が問題となっているのであるが，かかる歴史的状況は，歴史的生のさまざまな圏域に存在し得る。例えば，ローマ統治の変遷史を正確に知らない人で，タキトゥスの『年代記』第一章を完全に理解できる人は誰もいない。それゆえ，ここでは政治的状況についての知識が必要である。ホラティウスの詩行(『諷刺詩』第一巻，1，105)――「タナイスと，舅のウィセリウスとの間には誰か〔中間〕がいる」(Est inter Tanain quiddam socerumque Viselli)――をひとは文法的に徹底的に正しく解釈することができる。しかしもしひとがローマの私生活の特殊な歴史から，タナイスがまったくの宦官であり，舅のウィセッリウスが恐ろしい陰嚢ヘルニアを患っていたことを知らなけれ

ば，そこに含まれている当てこすりはわからない。アリストパネスの多くの箇所は，エウリピデスやピンダロスなどの詩行のパロディーを含んでおり，したがって文学の知識を前提とする。プラトンの『メノン』においては，ひとが対話の数学的諸前提を数学の歴史から突きとめるという点に，歴史的解釈が存している。哲学者たちの場合には，彼らがその学問の歴史的発展を通じて立っている，見地を理解することが一般的に重要である。近代の哲学者たちは，彼らの見地に身を置くことができないがゆえに，しばしば古代の哲学者たちをまったく間違って理解している。一つの書物において言語的現象あるいは文法的定理が引き合いに出されるとき，文法的な覚え書きですら歴史的解釈に属する。要するに，「歴史的」という表現はここでは最広義に受け取られるべきである。

ここから同時に帰結してくることは，この種の解釈はすべての言語的記念物に同じ程度で適用し得るものではないということである。著者の個性や発話のジャンルの性格に応じた適用可能性の尺度が存在する。著作家あるいはジャンルが主観的であればあるほど，歴史的覚え書きを最大限に特別な仕方で斟酌することがますます必要となる。ホメロスの場合には，それほど多くのことが前提とされていないが，これに対してピンダロスの場合には，並外れて多くのことが前提とされている。なぜなら，ホメロスは客観的に叙述しているが，ピンダロスは公然と何かに関係づけたり，何かを当てこすったりしながら語っているからである。ウェルギリウスの『アエネーイス』は，この点で，ジャンルの本質上この種の歴史的主観性を有するホラティウスの『諷刺詩』に比べて，はるかに困難が少ない。体系的な言語を用いるアリストテレスは，そのような解明を必要とすることが，生に立ち入るプラトンよりもはるかに少ない。後者の場合には，完全に歴史的土台の上に立っている劇的な衣をまとったものの基礎のみならず，時折見られる以前の時代や同時代の哲学者たちへの関係や，幾重にも隠された当てこすりが，解明されるべきものとして残されている。悲劇作家はこの点ではアリストパネスのような喜劇作家よりも容易である。喜劇においては，歴史的基礎はしばしばきわめて地方的な性質をもっているので，地

元の人々は爆笑するかもしれないが，よそ者はそれにまったく気づかないので笑わない。けれども，悲劇作家においても，多くの歴史的関係は存在する。ギリシア悲劇においては，ソポクレスよりもアイスキュロスの場合に，そしてエウリピデスよりもソポクレスの場合に，そのような歴史的関係が見出されることはより稀である。* 一般的に言って，また著者の個性を別にすれば，韻文では叙情詩と喜劇が，散文では哲学と修辞学が，〔歴史的解釈を〕最も多く前提としており，叙事詩と歴史叙述は最も少なく前提としている。ひと言で言えば，叙述が歴史的なものの性格から遠ざかれば遠ざかるほど，より高い度合いにおいてそれは歴史的解釈を必要とする ── しかしこれは徹底的に根拠のあるパラドクスである。歴史的解釈はまさに事実解釈（Sacherklärung）と同一のものではない。事実（Sache）は文法的解釈によっても明らかにされる。すなわち，それが言葉そのものにおいて表現され，機知のものとして暗黙裡に前提されているのでないかぎり，文法的解釈によっても明らかにされる。

さて，個々の場合に，歴史的解釈はどこで始めなければならないか，すなわち，歴史的解釈の適用可能性の判断基準はいかなるものか，ということはよくわからない。主要な判断基準は語られたことから容易に判明する。すなわち，客観的な語義を突きとめるために文法的理解が不十分なところで，歴史的解釈がつけ加わらなければならない。しかし文法的理解が不十分かどうかは，著者の個性と言語的作品のジャンルを知っているときにのみ，ひとは判断することができる。例えば，ピンダロスにおいては，かなり長い脱線，つまり見かけ上〔言説・思考が〕脇道へそれることが見出される。さて，もしピンダロスに本当に脱線があると信じるならば，このことはあらゆる叙述において非難すべきであり，ここではそれに加えて，詩の統一性をぼやけさせ，したがって，叙情詩のジャンルの根本的規則に違

---

* 『ギリシア悲劇の原理』*Tragoediae graecae princip*.［August Boeckh, *Graecae Tragoediae principium Aeschyli, Sophoclis, Euripidis, num eae, quae supersunt....*］([Heidelberg,] 1808)第十四－十五章参照。

反することになるであろうが，その場合にはひとは脱線を文法的に説明することで満足することになろう。ひとはそのとき，この詩人を完全には理解していないということについて，まったく意識していない。これに対して，ピンダロスの個性と彼の叙情詩のジャンルの性格を知っている人は，脱線が特別な意味をもっているに違いなく，したがって歴史的に説明されるべきであるということをまったく疑わない。脱線は，詩人が詩によむ人物との暗黙裡の関係において，その意義を有している。もしひとがこのような歴史的関係を認識すれば，詩は完全な統一性へと結合し，色彩と力とを獲得する。歴史的解釈は，これによれば，個人的解釈と種類的解釈とによって制約されている。もしひとが著者の個性とジャンルの特徴に習熟しておれば，どこで文法的説明が不十分であり，そして補完を必要としているかは，通常は容易に感じるものである。例えば，もしピンダロスが『オリュンピア祝勝歌集』オリュンピア第十一歌で，「われわれはゼウスの真っ赤に燃える稲妻を歌おう」[30] と言うとき，このことはそれがよまれる連関においては，歴史的関係を抜きにしては不可能である。しかしこの頌歌はロクリス［ロクロイとも呼ばれる。ギリシア中部 Corinth 湾の北の地方。］人のために作られたものであり，そして稲妻は，おそらく祝いの歌の演奏の際に設置されていた，ロクリスの紋章のなかにあった。* しかしながら，文法的解釈が不十分であるということが，歴

[30] ベークは第十一歌と言っているが，現在の標準的なテクストでは，引用箇所は第十歌に入っている。*Pindar 1,* The Loeb Classical Library, no. 56 (Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press, 1977), p. 170.なお，参考までに引用箇所を含むくだりを，最新の邦訳で紹介しておくと，「いにしえの創始にならって今われわれも，誇り高い勝利にちなむ名の歌を唱え，轟き渡るゼウスの雷と炎で出来た投槍を，あらゆる力を備えた燃えさかるいかずちを，讃えよう。」，となる。ピンダロス，内田次信訳『祝勝歌集／断片選』（西洋古典叢書）（京都大学学術出版会，2001 年），85-86 頁。

* 『ピンダロス註釈』*Explicationes Pindari*，203 頁参照。〔なお，『ピンダロス註釈』*Explicationes Pindari* というのは，ベークが校訂編集した『ピンダロス全集』*Pindari Opera*, I-II (Leipzig, 1811-21)に収録されている註釈部分のこと。〕

史的解釈の適用可能性に対する唯一の判断基準ではない。ある言語的作品のわれわれに知られている歴史的事情は，その作品の執筆対象となっている人々が，著者は一定の関係を考慮していると信じなければならないような，したがって，著者が意識的にそれを当てこすっていようといまいと，彼らが自分たちの思考の範囲に従って，必然的にこの関係へと導かれたような，そういう具合になっていることがある。この点に歴史的解釈の適用可能性に対する第二の判断基準が存する。これに関して判断を得るためには，ひとはあらゆる言語的記念物において，それが成立した歴史的諸条件について知っていなければならない。それゆえ，執筆の場所，時，きっかけをきちんと顧慮しなければならない。例えば，このような仕方で，ギリシア悲劇作家における歴史的諸関係が判明する。アイスキュロスが『慈しみの女神たち』［エウメニデンとは復讐の神から恵みの神に変じた女神エリニエンに対する婉曲的な呼び名。とくにアテナイのアレオパゴスにおいて崇拝された。］において(675-696)アレオパゴス［ギリシアのアレオパゴスの丘の上にあった古代アテナイの最高の司法機関］を称えるとき[31]，この作品の上演の際に，いかなる観客もこれのきっかけとなったものを見逃さない。アテナイの愛国者たちには痛ましいことに，少し前に最高法廷の権威がエピアルテス［アテナイの政治家。下層の民衆に近い立場を取り，紀元前462年に憲法改革を断行したが，翌年暗殺された。］によって弱められてしまっていた。** ソポクレスの『コロノスのオイディプス』が上演された時代に，最

[31] アイスキュロスは当該箇所において，アテーナーに次のように語らせている。「さてこんどはアテナイの市民方，流された血の裁きをする，この，最初の法の庭へとおいでたその上は，定めの掟を聞いて下さい。これがまた末永くアイゲウスの国民にとり，いつも司法の評議をこらす場所になりましょう。してこのアレースの丘は，その昔アマゾンの女軍が，テーセウスを怨みに思い攻め寄せた折，陣を置き握舎を設けたところ，ここに新しい城塞を，その折墨壁も高々と，城山に拮抗して築き上げ，アレース神に献げたのであった。それからして名も，アレースの岩山と呼びならわしたのが，この場所で，市民たちの畏敬の念，またその兄弟の恐れとが，昼も夜も同じく，彼らを正義にもとらぬよう守るであろう，もし市民たちが，みずから，これを改め変えない（とりこぼたない？）限りは。」呉　茂一「慈しみの女神たち」『ギリシア悲劇全集』第1巻（アイスキュロス篇）（人文書院，1984年），282頁。

**『ギリシア悲劇の原理』*Tragoediae graecae princip.*，45頁。

高法廷の力がまさに取り戻されたとすれば，この作品におけるアレオパゴスの讃美（943行以下）[32]は，観客にとってこの出来事への当てこすりとして現れたに違いなかった。*** ソポクレスの『アイアス』においては，サラミス島民たちの操舵の腕前が称えられる。このことはこの悲劇そのものから完全に解明されうる。なぜなら，そこでは合唱隊はサラミスの船乗りから構成されているからである。しかしすべてのアテナイ人は，その称賛が有名な国有船サラミニアの乗組員たちをもともに考慮に入れていたことを理解した。† エウリピデスは『ヒッポリュトス』において，重い病気の恐怖について語っているが，このことは，現在の形態におけるこの作品は悪疫の直後の時代に上演されたことから説明がつく[33]。テーセウスがそのなかで語る「おまえたちはなんと優れた男を失うことになるのか」（οἵου στερήσεσθ' ἀνδρός）[34]という言葉は，観客たちには偉大なるペリクレスの記憶を呼び戻したに違いない。†† 時折われわれは特殊な歴史的諸関係を一連の明確な証言においてのみ理解する。『コロノスのオイディプス』において，アンティゴネーは父親にポリュネイケスを受け入れるようにするために，次のように言う。「悪い子があり，怒りやすい人もほかにいますが，忠告を

---

[32]「わたしはよく知っていた，この地にはかの思慮深いアレスの丘の審判があり，このような浮浪者がこの国に住まうことを許さぬことを。こう信じて，わたしはこの捕物をやったのだ。」ソポクレス，高津春繁訳「コロノスのオイディプス」，『ギリシア悲劇全集』第2巻（ソポクレス篇）（人文書院，1986年），349頁。

***1826年の講義目録「アレオパゴスについての第一論文」*De Areopago dissertation prior*（『小品集』第四巻，252-253頁）参照。

† 『アテナイ人の国家財政』第一巻，339頁以下参照。

[33]『ヒッポリュトス』は，紀元前428年に上演され一等賞を獲得した作品であるが，その二年前の430年にはアテナイに疫病が蔓延し，429年にはペリクレスも疫病に斃れている。

[34] エウリーピデース，川島重成訳「ヒッポリュトス」，『ギリシア悲劇全集』第5巻（岩波書店，1990年），369頁。

†† 『ギリシア悲劇の原理』*Tragoediae graecae princip.*，180頁以下参照。

容れ，友達の人を魅する言葉に心を変えるのでございます」[35]。もしわれわれが偶然にもある覚え書きをもっていなかったとしたら，われわれはここに何も特別な関係を発見しないであろう。その覚え書きによれば，ソポクレスはこの作品を執筆当時，穏便に解決されたものの，自分の息子のイオフォンと争いをしていたのである。実際，アテナイ人はみなその言葉のなかにこの事件への当てこすりを見たに違いない。* 歴史的解釈にとって，証言は当然のことながらきわめて大きな価値をもっている。もちろんその信憑性は歴史的批判によってはじめて確定されるべきである。ここでもひとはまずもって，あらゆる著者をできるだけ彼自身から説明するよう努めなければならない。その次に洞察に富む同時代人が顧慮されるべきである。後代の人々においては，彼らがどこからその知識を得ているかが重要である。例えば，ピンダロスのἄριστον ὕδωρ〔最良の水〕が何を言おうとしているか，明らかでないとしたら，最終的にはアリストテレスが決定してくれる。彼は後代の人々の仰々しい知恵ではなく，その表現の冷静な意味を教えてくれる。後代の人々はその知恵をふたたび探し出し，さらにそれをインドの知恵で飾り立てたからである。アリストテレスにはその表現についての哲学的解釈がたしかに当然のものと思われた。彼が哲学的解釈を企てていないことは，当時人々はその意義についてあまりにもたしかだったので，健全な意識をもっている人は誰もそのような不合理を思い浮かべることができなかった，ということの証拠である。** たとい文法的説明そのも

---

[35] 高津春繁訳「コロノスのオイディプス」，『ギリシア悲劇全集』第二巻（ソポクレス篇）（人文書院，1980年），356頁。参考までに，最新の訳ではこの箇所は次のように訳されている。「ほかにも悪い子供を持って癇癪（かんしゃく）をおこす人はいるものですが，友のやさしい言葉に諭（さと）され，持ち前の性分も，やわらぐというものです」。ソポクレス，引地正俊訳「コローノスのオイディプース」，『ギリシア悲劇全集』第3巻（岩波書店，1990年），185頁。

* 1825/26年のプロオイミオン「ソポクレスのコロノスのオイディプスの事情について」De Sophoclis Oedipi Colonei tempore（『小品集』第四巻，232-233頁）参照。

**『ピンダロス註釈』*Explicationes Pindari*，102-103頁参照。

のが歴史的補完を要求するとしても，もちろん，われわれの知識はしばしば，言語的記念物の歴史的諸関係を理解するのに十分ではない。しかしながら，ひとはそのような場合に，時折，仮説的な説明をするための十分な拠りどころをもっている。この場合には，一方で文法的語義を実際に補完し，他方で言語的作品そのものと，ならびにそれ以外の所与の歴史的データと調和している，歴史的な仮説が重要である。そのような仮説を形づくるためには，ふたたび批判的活動が必要である。例えば，ピンダロスの『オリュンピア祝勝歌集』オリュンピア第十二歌においては，そこで謳われているヒメラ［ヒメラはシケリア北部の都市］人のエルゴテレス［ヒメラ人。前466年ないし前472年のオリュンピア競技の長距離走の優勝者。］は闘鶏用の雄鶏と比較される。ところで，ほぼこの詩が執筆された時代のヒメラから出土した古い硬貨には，雄鶏が，おそらくアテナイにとって神聖な闘鶏が見出される。このことは次のような仮説へと導く。すなわち，アテナイ同様ヒメラでも闘鶏が一般的に行われており，そこからあの比較はヒメラ人に対する生き生きとした関係を保っていたに違いない，という仮説である。***『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第十－十一歌においては，ヒュペルボレオイとオレステスの母殺しに関する脱線は，われわれにとって理解できない。与えられたデータから一つの仮説を形づくるのはきわめて難しい。* 適当でない仮説の一例は，『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第九歌についてのディッセンの説明である。この詩のなかにはアポロンとキュレネの愛についての神話が織り込まれており，そしてこの神話は疑いなく，ピンダロスによって謳われたキュレネ［アフリカにあるリビアの都市。ピンダロスによれば，都市の名称は，その名の名の乙女キュレネがアポロンに攫われて市の建設の基になったという神話に由来するという。］のテレシクラテス［キュレネ人カルネイアダスの子，前474年のピュティア競技大会における武装競技の優勝者。］の個人的事情への諸関係を含んでいる。この人物はこの詩が執筆された当時テーバイにいたが，この詩もまたテーバイでまず朗読された。そして彼はテーバイの種族アイゲイダイ［「播かれた人々」（テーバイ建国の祖カドモスが播いた竜の歯から生え出た人々）の生き残りの一人のアイゲウスに発する，テーバイの貴族の一門。］と親しくしていた。ここから，そして神話もテーバイと関係していることを示唆す

***『ピンダロス註釈』*Explicationes Pindari*，210頁。

*『ピンダロス註釈』*Explicationes Pindari*，330頁と338頁。

る若干の他のデータから，ディッセンはピンダロスが，キュレネに対するアポロンのように，テーバイのある貴族の乙女に暴行しようとした，テレシクラテスの冒険を当てこすっていると推測している。しかしこの詩人が頌歌の最高かつ最重要な部分を，そのような行為に捧げたはずだということは，少なからぬ論拠からしてまったく信じがたい。ディッセンが動機として基礎に据えた，やんわりとした非難は，頌歌にとっていささか厳格すぎると同様，ここでは事柄そのものにとって不適切であった。神話についてのより厳密な考察は，次のようなもう一つの仮説へと導く。すなわち，テレシクラテスはその詩が執筆された当時，テーバイのアイゲイダイの女性と婚約しており，まさに花嫁を故郷に連れて帰ろうとしていた，という仮説である。かくしてアポロンとキュレネの徹底的に純潔な愛は，テレシクラテスの状況にとって典型的であるような仕方で，叙述されているのである。神話のすべての特質はこのような仮定から説明がつくし，それにこの仮定はそれ以外のすべての考察対象となっている状況に対応している。** わたしが前述のディッセンの仮説を適当でないと見なすように，ゴットフリート・ヘルマンは，わたしが『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第二歌の説明のために立てた仮説を，受け入れがたいものとして退ける。後者においては，イクシオン[36]の冒瀆行為についての，つまり彼の親族殺害とヘラに対する犯罪的愛情についての，詳しく描かれた神話が何を意味しているかは，不明確である。わたしはそのなかにヒエロン［シラクサ王（前478年から467年の治世）。ピンダロスやアイスキュロスなどのパトロンとしても有名。］に対する当てこすりを見る。すなわち歴史的証言によれば，ヒエロンは，彼の兄弟のポリュゼロスを，彼が命を落とすことを願って，クロトナ方面に派遣したという罪を負わされた。しかしポリュゼロスはダ

**「ディッセンによるピンダロス版についての批判」（1830年）（『小品集』第七巻，389-398頁）参照。

[36] テッサリア人，ケンタウロイの祖。義父を殺害し，ゼウスに清められてオリュンポスに住むことを許されたが，ヘラ（ゼウスの妻）に邪な想いをかけたために，ゼウスに罰せられた。

マレーテの父である舅のテロン［アクラガス（現アグリジェント）の僭主。在位期間は前488年から472年まで。471年ヒエロンに敗れて逃走。］のもとに逃れ，そしてヒエロンはこの兄弟およびテロンといまにも交戦しようとしていた。ここでわたしは同時に，ヒエロンがポリュゼロスの妻のダマレーテと結婚しようとしたと，さまざまな根拠に基づいて仮定し，そしてイクシオンについての神話が述べられているそのやり方のなかに，その他の点では立派でなくもないヒエロンの，このような不幸な過ちを見出したのであった。ゴットフリート・ヘルマンは，意図的な犯罪という非難を含んでいるそのような関係を，ヒエロンへの頌歌のなかに読み込むことは不可能であると見なし，かくして別の仮説を提示した。しかしながら，わたしは『ピュティア祝勝歌集』ピュティア第二歌を，ヒエロンに送付された警告の歌とみなす。その警告の歌において，この領主から遠く隔たった時点にいるピンダロスは，高次の立場から政治的に考慮して，ダマレーテに対する無限の意図から，また兄弟との交戦から，ヒエロンを連れ戻そうとしているのである。詩人がこれに対してイクシオンの運命を引き合いに出すとき，これははっきりとした適用なしに起こるが，かかる適用はかなりの慧眼を有する人のみがなし得たところである。とくに親族の血を流してはならぬという最初の警告がなされる際に，ポリュゼロスの生命を狙ったものの失敗に終わった試みが意図されているということを，必ずしも誰でもが思いつくわけではない。なぜなら，この試みは当然秘密だったからである。ひとはそこに兄弟と交戦しないように警告するという，われわれによって前提された目的をより容易く見たのである。そして詩人が，彼の秘めた思いを神話的に具現化することを通して，領主を揺さぶろうと努めることによって，彼は同時に，十分なしかし当然受けるべき称賛によって，領主のより高貴な本性がその計画を助けるよう呼びかける。ここでは真剣な警告が問題なのであり，頌歌が問題なのではないということは，ピンダロス自身が次の言葉において表示している。すなわち，「率直に話す人はいかなる体制においても，僭主制においてすら，最善のひとである。」ちなみに，ヒエロンは実際にポリュゼロスならびに彼の舅のテロンと和解したということ，そしてその際テロンの親類の女性を妻として得たということ，このよ

うな事情もまたわたしの仮説を証拠立てている。* 歴史的解釈を適用できるかどうかについて，そしてとくに仮説的解釈が許容できるかどうかについて，最終的な決定を下すものは，しばしば感情のなかに存在している。ここではとくに解釈者の親和性（Congenialität）が肝要である。すなわち，著者の個性に身をおいて理解する人のみが，特定の場合の著者の念頭に特別な関係が浮かんでいたかどうかを，知るのである。例えば，ソポクレスの感覚の仕方にある程度身をおいて考えたことのある人は，『アンティゴネー』の第3のスタシモン，エロースへの歌のなかに，── 近年の解釈者が行っているように ── ペリクレスとアスパーシア[37]の関係への当てこすりを見出すのは不可能である。この合唱はハイモン［テーバイ王クレオンの息子。アンティゴネーは彼の許嫁。］のアンティゴネーに対する愛にのみ関係しており，全体的な状況からしていかなる観客にも，外的な，遠く隔たった付随的諸関係を思い起こさせることはできなかっただろう。しかしましてや力強いシーンの印象をそのような付随的諸関係によって弱めることなぞ，ソポクレスの脳裏に浮かぶことはできなかっただろう。

歴史的解釈は，いかなる客観的関係が実際に言語的記念物のなかに存しているかを，突きとめるべきである。そこから生じてくるのは，このような諸関係がどの範囲にまで及ばなければならないか，ということである。言語的記念物を歴史的諸関係と調和させることは，目標ではあり得ない。なぜなら，目標は実際にはそうした諸関係と矛盾することがあるからである。それゆえ，ひとは歴史，経験，あるいは共通感覚（sensus communis）[38]

---

* この仮説の詳細な根拠づけとヘルマン的見解への反駁を参照のこと。『小品集』第七巻，430頁以下。

[37] ペリクレスの愛人。ペリクレスが離婚してから約五年後に二人の関係は始まり，彼が死ぬまでその関係は続いた。ペリクレスとアスパーシアの間には男児が生まれたが，アスパーシアはなかなかの知性の持ち主だったらしく，ペリクレスへの影響も取り沙汰され，しばしば攻撃の対象ともなった。

[38] ここで「共通感覚」と訳出した sensus communis は ──「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』── 翻訳・註解

に反するところのものを，説明のために提示してはならない，という有名な解釈学的原則は，まったく間違っている。歴史に関するかぎり，それがいかなる種類のものであれ，著述家は歴史的現象について，真理には合致しない理解をもつことができる。もしひとが歴史と調和するような，そのような諸関係をそこに探し求めようとすれば，ひとはこの場合には著作家の言葉をたしかに間違って解釈することになろう。修辞学や詩歌においてはきわめて頻繁にそうであるように，著者はしばしば意識的に，そして意図的にすら，歴史的真理を無視する。したがって，もしひとが歴史的解釈によってプラトンの著作からすべての時代錯誤を取り除こうとすれば，それは無駄骨というものであろう。プラトンは舞台装置を用いて彼の対話を大抵は一定の時代に移している。しかしそこにおいてはるかのちの時代に属する歴史的事実に言及されることは稀ではない。『メノン』，『ゴルギア

（その１）──」『人文論集』第 40 号，注 5 で説明したように ──，近代語の「コモンセンス」（common sense）の語源となっているものである。ベークがここで“der gemeine Sinn”（S. 5）と言わずに，敢えてラテン語を使用していることに留意すると，ここには単なる「常識」を超えた，より深い意味が込めているのかもしれない。

周知のように，キケロをはじめとするローマの思想家たちは，「人間に共通する感覚」としての「共通感覚」（sensus communis）について語り，これを人間が社会生活を営んでいく上で不可欠な共通の基盤であると見なした。これが近代語の「コモンセンス」（common sense）の直接の語源となっているわけであるが，その奥にはさらにアリストテレスに由来する，ギリシア語の概念がある。すなわち，アリストテレスによれば「視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚」という五つの個別感覚（五感）は，それぞれ「色，音，臭い，味，固さ」という固有の感覚対象を把握する能力であるが，人間にはこれらの個別感覚とは別に，それらを横断的に把握する統合的な能力が具わっている。アリストテレスはこれを「共通感覚」（κοινή αἴσθησις）と名づけた。ラテン語の sensus communis のなかには，アリストテレスのこの概念も同時に含まれているのである。それゆえ，ここでは「常識」とせずに「共通感覚」と訳出することにした。なおこれについては，中村雄二郎『共通感覚論』（岩波書店，1979 年）が有益な洞察を提供している。

ス』，『饗宴』，『メネクセノス』および『国家』においてはそうである。* そのような時代錯誤はなるほど幻想を攪乱するが，しかし哲学者〔たるプラトン〕はまさしくそれによって一定の目的を達成しようと欲することができるのである。そのようにして惹き起こされた対照は『メネクセノス』において最も強烈である。ここでコリント戦争における戦死者への追悼演説がアスパーシアに語らせられるが，この追悼演説はペリクレスの存命中に彼女がソクラテスのために述べたものである。一方，それが関係している出来事は，対話が捏造された時代の約四〇年後にあたっている。しかしもしこの対話がこの時代に，つまりアンタルキダスの講和[39]ののちに，執筆されているとすれば，この表現全体は同時代人たちには冗談として現れたに違いなかった。このような冗談によって，同時代の修辞家たちが演説のなかで意図する嘲笑は，とくに素晴らしい，またサビの利いた，形式を獲得するのである。それゆえ，このような時代錯誤から対話の真正性に反対する理由を取り出されるべきではない。** 最大の混乱へと導いたのは，歴史的解釈は経験と一致していなければならない，という見解である。例えば，奇跡はわれわれの経験と一致するような仕方で，自然的な事象として現れるというふうに，ひとは新約聖書を解釈してきた。そこから子供っぽく馬鹿げたいろいろな説明が生じてきた。このような説明はかつて多数のドイツの神学者たちに畏敬の念を起こさせたが，それは彼らが新約聖書の言語について十分な知識と解釈学的教養をもっていなかったからである。新約聖書記者たちが奇跡を信じていたことは，あらゆる思慮深い解釈者には明白であらざるを得ない。この信仰が歴史学的にどのように説明され得るか

---

*『小品集』第四巻，447-448頁，および『小品集』第七巻，71頁以下参照。

[39] アンタルキダスの講和条約とは，紀元前386にギリシアとペルシアの間で締結された条約のこと。アテナイに代わってギリシアの覇権を手にしたスパルタは，しかしやがてその保持に困難を感じ，アンタルキダスをペルシアに派遣して，アルタクセルクセス2世に援助を求めた。かくして作成された条約は，全ギリシアに強要されることになった。

**_In Platonis, qui vulgo fertur, Minoem_ (1806)，182-183頁参照。

は，別問題である。歴史的説明が証拠立てなければならない多くのことは，共通感覚に違反する。ナンセンスなことは現実的には十分頻繁に起こるものであり，したがって解釈によって抹殺されるわけにはいかない。例えば，シェイクスピアの『ヴェニスの商人』や『ハムレット』においては，オフェーリアや墓堀人の語る言葉のなかに，意図的にナンセンスなところがある。古代の喜劇においても同様である。しかし劣悪な作者たちにおいて，意図せざるナンセンスのいかに多いことか！　それゆえ，解釈は原則的にいろいろな矛盾の調停を達成しようと努めなければならないということも，間違った規則である。矛盾もまた，プラトンの『パルメニデス』においてそうであるように，作品の計画のなかに存していることだってあり得る。もしひとが聖書の解釈に対して，聖書のなかのあらゆる事柄は，信仰オヨビ教理トノ類比（analogia fidei et doctrinae）によって解釈されるべきである，と指定するならば，それはまったく非歴史的である。ここでは解釈が定位すべき尺度ですらみずから確定としていない。というのは，聖書の解釈から生まれた信仰論は，非常にさまざまな形態を採ってきたからである。歴史的解釈によって確定されるものは，それが正しいかろうと間違っていようと，言語的記念物において意図されていることに限定されるべきである。歴史学的真理，共通感覚，あるいは論理に違反する内容が，著者にあることをどの程度信ずることができるかは，その著者の個性についての知識から，文法的解釈に基づいて確定されるべきである。ひとが意図的な矛盾や一貫性のなさを仮定しなければならないかどうかは，著者が追及している目的から判明する。したがってそれは種類的解釈によって突きとめられるべきである。もしひとがこの道を進んで，純粋に文法的な解釈において浮び上がる間違いや矛盾が，ある特定の場合に著者にあるとは信じられないという確信に到達するのであれば，歴史的解釈の適用可能性に対する上述の第一の判断基準が存在する。けれどもこれはいかなる場合にも，言葉の文法的意味が許す以上には，先に進むことが許されない。── それは，その適用可能性についての他の判断基準が登場するときですら守られなければならない限界である。しかしこの適用可能性に対して述べられた第二

の判断基準から，第二の限界が明らかになる。すなわち通常は，文法的な語義が許す場合でも，歴史的解釈によって，著者がより頼む言葉がそれに関して考えることができるであろう以上のことを，言葉のなかに読み込んではならない。この基準を蔑ろ(ないがし)にすることから，わたしが上で述べた（原典91頁），アレゴリカル解釈の誤用が生じてくる。とくにギリシア悲劇作家においては，歴史的解釈一般についてそのような誤用がなされている。それゆえ，正しい限界を守るためには，ひとは著者が誰に向けて書いているか，そして著者が何を前提とすることができたかを，まず知らなければならない。その場合，単に群衆だけでなく，しばしばまったく特定の読者が問題となっている。そこでピンダロスは『オリュンピア祝勝歌集』オリュンピア第二歌において，みずからの詩歌について次のように述べている。すなわち，彼はみずからの肘下のえびらの中から多くの矢を放つが，それは知識経験の豊かな者には明るく響くものの，群衆には解釈を必要とする，と[40]。さてしかし，著者がその人々に向けてその言葉を語っている当の人々は，著者の個性と作品のジャンルの性格に応じて，その言葉のなかにふたたび多かれ少なかれいろいろな関係を追求する。彼らがこれをよく知っていればいるほど，彼らは歴史的諸関係をよりよく理解する。同じことは彼らの立場に立つべき解釈者にもあてはまる。最初で最後の条件として，つねに新たに個人的解釈と種類的解釈が浮かび上がる。そしてこれによって歴史的解釈の適用可能性に対する限界は，しばしば非常に柔らかなものとなり，精神的に同質的な解釈者のみがそれを見出すことができるのである。

§23．方法論的補遺

文法的解釈と歴史的解釈は相当学問的な装置を必要とする。文法的解釈に必要なことは，一般的ならびに特殊的な言語の慣用を確定するために，

---

[40]「わが肘下のえびらの中には，速い矢が数多く入っている／── だがそれは智ある者にだけ語りかけ，万人に向かっては解釈者を必要とする。」ピンダロス，内田次信訳『祝勝歌集／断片選』（西洋古典叢書）京都大学学術出版会，2001年，23頁。

必要な並行箇所を手元に置くことである。歴史的解釈には多数のメモが必要である。それゆえ，非常に多くの引用文は文献学者にとって不可欠である。最大限の正確さをもって引用することは，まさに本来的な意味で文献学的である。なぜなら，文献学は外的な証拠に基づいているが，一方哲学はみずから自身が内的な証人でなければならないからである。ひとは近代になると，文献学によって突きとめられたすべてのことを，手早く事典にまとめ上げようとしてきた。古代言語一般についての，および個々の著作家の言語の慣用についての事典は，ますます完璧なかたちで仕上げられ，同様に一般的および特殊的な事典も仕上げられる。それによって研究は容易さと確実さを非常に獲得してきた。しかし文法的解釈ならびに歴史的解釈においてとりわけ理解しなければならない諸々の表象の連関は，ひとはこれを事典にあたって調べることはできない。このためには，すでに突きとめられたことを連関において研究することが，したがって文法学を含めて古典古代学の実際の諸学科を資料に即して研究することが，必要である。ひとは連関し合った知識を可能なかぎり持ち合わせていなければならないが，そのような連関的知識に基づいて，つぎに事典が活用されるべきである。事典は連関し合っていないものも，それゆえ維持するのが難しいものも，より多く含んでいる。しかし事典が提供する情報は，個々のものの連関において理解するためには，あらゆる比較的難しい点において原資料から精査されるべきである。事典の他には，著作家についての最良の索引とインデックスに依拠しなければならない。そして歴史的解釈に関しては，著作家についての良質な歴史的序論に依拠しなければならない。しかしとくに古典古代に成立した著作集が考慮されるべきである。これらの著作集は近代の事典には決して存分に利用されていないからである。古代のグロッサリア〔Glossarien：註解集〕[41] は多くの著作についてきわめて特殊な

[41] グロッサリア（Glossarien）とは，註解（グロッセ）を収集したもので，しばしば独立したかたちで，あるいは一定のテクストの付録として出版された語彙索引を指す。

註解を提供する。これに関しては，ギリシア語のものとしては，アポロニオス(ソフィスタ)，ポルックス，フィリニコス，モエリス，ティマエオス，〔少し新しいところで〕ハルポクラチオン，アンモニオス，ヘシキオス，フィロクセノス，フォティオス，エティモロギークム・マグヌム(Etymologicum Magnum)[42]，スイダス，ゾナラス，レクシカ・セグエリアーナ（Lexica Segueriana)[43]，トマス（マギステル）がある。── ラテン語のものとしては，フェストゥス[44]とノニウス[45]がある。これらの著作集は古代の文法家の著作から導き出された語彙の説明を含んでいるが，こうした説明は通常個々の箇所に関係しており，したがって特別な価値を有している。類似の意義を有しているのは，古代の釈義的論評の選集としてのスコリア〔Scholien：古典の注釈〕[46]である。一例を挙げると，テレンティウス，ホラティウス，ウェルギリウス，オウィディウス，ゲルマニクス，ペルシウス，ルカヌス，スタティウス，ユウェナリウス，キケロ ── ホメロス，ヘシオドス，ピンダロス，悲劇作家たち，アリストパネス，リュコフロン，アラトゥス，テオクリトゥス，カリモコス，ロドスのアポロニオス，ニカンドロス，詞華集；トゥキュディデス，プラトン，アリストテレス，デモステネス，アイスキネス，イソクラテスについてのそれである。スコリアは歴史的解釈にとってとくに重要である。しかしひとはスコリアにおいてもグロッサリーにおいても，つねに意見と事実とを区別しなければならない。とはいえ，これはしばしば非常に難しいことである。語義のみを一挙に理

---

[42] *Etymologicum Magnum*（ギリシア名：Ετυμολογικόν Μέγα）とは，1150年頃コンスタンティノープルで編纂されたギリシア語の百科事典的な辞典（編纂者不詳）で，伝統的にこの名で呼ばれてきている。それはビザンツにおける最大の事典で，多くのより古い文法学，辞典，修辞学の著作に依拠している。

[43] Lexica Segueriana もビザンツ後期に編纂された辞典。

[44] Sextus Pompeius Festus. 2世紀のラテン文法家・辞書編纂者。

[45] Nonius Marcellus. 4世紀のラテン文法家・辞書編纂者。

[46] スコリア(Scholien)とは，もともとは，ギリシアやローマの写本の欄外に記された説明的な註のことをいう。

解するパラフレーズ（Paraphrasen）[47] や，通常は稀少な語のみを与える行間註解（Interlinearglossen）[48] は，それほどの意義は有していない。現存の補助手段に関連して，ひとは自分でさらに収集しなければならない。とりわけそれについての十分な歴史的序論が存在しない著作については，そのようなものを自分で作成することが推奨されるべきである。当然のことながら，そのなかには枝葉末節的なメモが収集されるべきではなく，著作の歴史的基礎が最も特殊な点に至るまで確認されるべきである。索引やインデックスが存在しない著作を根本的に研究するためには，索引やインデックスを自分で作成するか，あるいは作成させることが，同じように不可欠である。最後に，必要悪ともいうべきものが，ひとが折々に作った自分自身の注釈や，さらにはあらゆる人目を引くこと，難しいこと，珍しいことを記入する，アドヴェルサリア〔Adversarien：手控え，書抜帳，備忘録〕[49] である。オランダの文献学者たちはとくにアドヴェルサリアを推奨し，ヨーハン・アウグスト・エルネスティとヨーハン・マッティアス・ゲスナー［Johann Matthias Gesner, 1691–1761.ドイツの古典文献学者。］が そのようなアドヴェルサリアをもっていなかったことを，何にも増して惜しがった。もちろん彼らはその代わりにより沢山の精神をもっていた。しかしまさに多くの資料が存在し，しかもこうした資料は精神を形成することなしに，ただ精神を過重な負担を負わせるものであるので，こうした資料は頭の中に入れて持ち運ぶよりは，紙に書き記したかたちで見出せるようにした方がより好ましい。一般的なアドヴェルサ

---

[47] パラフレーズは，ギリシア語のπαραράζω，παράφρασις に由来し，「同じことを違う言葉で言うこと」を指す。

[48] Interlinearglosse とは，文字通り，行の間に書き記された註釈（グロッセ）のことで，とくに中世初期の写本に多く見られる。

[49] アドヴェルサリア（Adversarien）とは，ラテン語の adversaria（＝a book at hand in which all matters are entered temporarily as they occur, a waste-book, day-book, journal, memoranda, etc.）に由来し，一般的に「1．覚え書き，メモ，2．手帳，備忘録，雑録，3．注釈」を意味するが，ここでは2番目の意味で用いられている。

リアはとくに若いときに必要である。だがそれはこれを拡張して生涯の終わりに至るまで継続することはできない。なぜなら，そのための時間は十分にないからである。晩年になると，特定の目的に絞ったアドヴェルサリアに限定せざるを得ないが，これも大部分は紙切れのかたちで存在することもあり得る。ライプニッツ，カント，ジャン・パウル，アレクサンダー・フォン・フンボルトなど，非常にさまざまな精神の持ち主たちが，そのような紙切れからなる作品をもっていた。こうした紙切れからなる作品は記憶の手助けをするが，とはいえひとはそれにすべてを委ねてはならない。わたしは特別な知識を書見台においてもつよりも，頭のなかに大量の知識をもつことの方を好む。アドヴェルサリアを見せびらかす非常に多くの御仁は，非常に僅かの知識しかもっていないものである。しかしながら精神は記憶作業に苦しんではならない。多くの事柄を知らなかったり，あるいは忘れたりすることは，分別を忘れることよりも良いことである。もちろん，多くの人々はそのアドヴェルサリアのなかに，すでにどんな子供でも知っているために，われわれの時代にはもはや引用文でもって証明されるには及ばないような，いろいろな事柄を書き記している。解釈に際しては，本題に属さないあらゆるがらくたは徐々に排除され，前提されているものとして，事典を参照するよう指示されなければならない。そのような引用文のバラストで素晴らしい作品を作ることができた時代は過ぎ去った。それに代わって，著作家の意図ないし精神へと深く入り込むことが起こらなければならない。著作家のなかへと沈潜すること，彼らからおのが存在の意味を汲み出すことを，本務と見なさない人は，良い解釈者にはならないであろう。その際，ひとはとりわけ早まった批判をしないように気をつけなければならない。早まった批判は正しい見方をあらかじめ邪魔するからである。ひとはある箇所を損なわれたものだと言明するために，非常に瑣事に拘った批判や長々しい証明をすることができるが，著作家の精神の中に入り込んで考えることのできる単純な意味は，難点と考えられているものをすべて一挙に解決する。なぜなら，それは件(くだん)の批判を行った人たちが，頭だけで作業して，直観でもって作業しなかったがゆえに，〔著作家を〕理

解しなかったということを，指し示すからである。しかしわれわれの叙述から，次のことが十分に明らかになった。すなわち，文法的解釈と歴史的解釈は，個人的解釈および種類的解釈とつねに結合して営まれる場合にかぎって，このような唯一実り多い仕方で成功することができる，ということである。